

年報

青森県立美術館

令和2年度

目次

青森県立美術館の沿革

展覧会

- 006 企画展
- 014 コレクション展

学芸

- 030 美術資料収集
- 035 美術資料貸出状況
- 036 作品保存修復

教育普及

- 038 普及プログラム
- 039 スクールプログラム
- 041 サポートスタッフ

パフォーマンスアーツ

- 044 演劇
- 050 音楽
- 056 映画

サービス等

- 058 貸館
- 060 図書室
- 061 キッズルーム
- 062 博物館実習
- 063 サポートシップ倶楽部

資料

- 066 広報
- 067 広聴
- 068 入館者数
- 069 運営予算・決算
- 070 組織
- 071 関係規程等
- 074 施設設備概要

青森県立美術館の沿革

| | |
|-------------|---|
| 1990年3月 | 美術館の設置について検討を開始することを表明 |
| 1991年1月 | 美術館、音楽・演劇ホール等の複合文化ゾーンである「総合芸術パーク」の検討開始 |
| 1996年2月 | 「総合芸術パーク」の建設場所を、三内丸山遺跡に隣接した移転予定の総合運動公園跡地に決定 「総合芸術パーク」の核となる美術館を先行し整備することが決定 |
| 1999年度 | 美術館設計競技を実施、最優秀者に青木淳氏 |
| 2000年度 | 建築基本設計 |
| 2001年度 | 建築実施設計 |
| 2002年度 | 美術館建築工事着工 |
| 2003年度 | 別棟で建築予定だったアトリエとレジデンスを休止、同じく別棟で建築予定だったレストランとミュージアムショップを美術館本体に組み込む等見直しを行う |
| 2005年9月20日 | 美術館竣工 |
| 2006年3月17日 | 「運営諮問会議」設置 |
| 2006年4月1日 | 青森県立美術館開館準備室設置 |
| 2006年10月17日 | 「青森県立美術館条例」制定 |
| 2006年6月13日 | 開館プレス発表開催 |
| 2006年7月13日 | 開館（館長 三村 申吾） |
| 2007年7月24日 | 博物館法に基づく博物館相当施設登録（青森県教育委員会告示第11号） |
| 2007年9月13日 | 「県民のための美術館づくり懇話会」設置 |
| 2008年7月19日 | あおもり犬屋外連絡通路開通 |
| 2008年7月20日 | 青森県立美術館2周年記念シンポジウム開催 |
| 2009年1月1日 | 館長 鷹山 ひばり 就任 |
| 2010年5月7日 | 入館者150万人達成 |
| 2010年7月8日 | あおもり犬えさ皿完成 |
| 2011年7月11日 | 入館者200万人達成 |
| 2011年7月13日 | 開館5周年 |
| 2012年11月14日 | 入館者250万人達成 |
| 2013年11月14日 | 入館者300万人達成 |
| 2015年4月1日 | 館長 杉本 康雄 就任 |
| 2016年3月 | 入館者350万人達成 |
| 2016年3月19日 | 「青森県立美術館アドバイザーボード」設置 |
| 2016年7月13日 | 開館10周年 |
| 2016年12月23日 | 八角堂リニューアル 《Miss Forest / 森の子》完成 |
| 2018年5月25日 | 入館者400万人達成 |

展覧会

企画展

生誕 110 周年記念 阿部合成展 修羅をこえて～「愛」の画家

コレクション展

コレクション展 I

コレクション展 II

コレクション展 III

コレクション展 IV

凡例

- 1 出品作品の項は、出品番号、作家・作品名、制作年、材質技法、寸法（高さ×縦×横、cm）、所蔵先の順に記した。
- 2 掲載記事は新聞記事を主として記載している。

阿部合成展 修羅をこえて～「愛」の画家

開催概要

2020年11月28日（土）－2021年1月31日（日）

開催日数：57日

開館時間：9:30 - 17:00（最終入場 16:30）

休館日：12月14日、28日－1月1日、12日、25日

会場：青森県立美術館 企画展示室

主催：阿部合成展実行委員会（青森放送、青森県観光連盟、青森県立美術館）

協力：青い森鉄道、JR東日本青森商業開発

後援：NHK青森放送局、青森ケーブルテレビ、東奥日報社、デーリー東北新聞社、陸奥新報社、青森県教育委員会、青森市教育委員会

総入場者数

5,354人

有料入場者数

2,927人（目標値 14,200人、達成率 20.6%）

関連行事

展覧会カタログ

阿部合成展 修羅をこえて～「愛」の画家

210×297mm 128頁

2021年1月15日 初版発行

編集・執筆：青森県立美術館（担当学芸員：池田 亨）

デザイン：村上朱美（有限会社 STUFF）

印刷：東奥印刷株式会社

発行：阿部合成展実行委員会



展示風景



青森市浪岡出身の阿部合成（1910-1972）の生誕 110 周年を記念する回顧展。

兵庫県立美術館所蔵の代表作『見送る人々』を中心に、県内外の美術館および青森県立美術館の所蔵作品あわせて約 210 点を集めて開催した。

展示構成は通常の回顧展のように年代順に展示するのではなく、第 1 章に最晩年の作品群、最終章に代表作であり、筆禍を招いて阿部合成の人生に大きな影響を与えた『見送る人々』を展示。間はテーマによってまとめて展示することで、生涯を通じて多様な題材・技法を用いて制作した阿部合成の芸術の全体像を提示することを試みた。

今回は、県内では 10 年ぶりに展示される『見送る人々』を中心に、これまであまり紹介されることのなかった作品を展示することができ、すでに阿部合成の作品について熟知している県内の関係者やファンにも好評であった。また、RAB による積極的な CM 等の広報展開により、これまで阿部合成のことを知らなかった層に対しても、青森県を代表する洋画家であり、太宰治の友人であるこの芸術家について関心をもってもらうことができたと思われる。コロナ禍で県内外の出張などを自粛していたことから事前の作

品の写真撮影などができなかったこともあり、図録の発行は展覧会途中になってしまったが、出品の油彩作品のすべてを紹介する図録は、今後の研究や展示に資することが期待される。

展示期間は国内のコロナ感染症の新規感染者数がピークをむかえた時期と重なったこともあり、県内の動きも鈍く、また県外からの観覧者も期待できない状態ではあったが、この機会に郷土を代表する画家であり、青森県立美術館の主要な所蔵作家である阿部合成について、県民、特に青森市民に知ってもらいたいという意図のもと、会期終盤に向けて積極的な広報・営業を行い、最終的には 5000 人を超える来館者を迎えることができた。オープニングセレモニーは人数を抑え、会期中のイベントも開催できなかったが、展示作品の撮影を可能にしたことにより、SNS を通じて展示風景や作品画像が広く紹介され、美術館から発信するツイッターなどでの作品のエピソードとあわせて、WEB を通じた広報は有効に行えたと思われる。

コロナ禍という特殊な状況の中で制限された内容ではあったが、県出身で、当館が多くの所蔵作品を有する画家の、生誕記念としての企画展であり、今後の更なる研究・紹介に向けた礎となる回顧展だったと思われる。

出品作品

■サイズについて、平面作品は縦×横 (cm)、立体作品は高さ×幅×奥行き (cm) の順に表記している。

第1章 折りと鎮魂

《自画像 (絶筆)》

1972年

油彩・キャンバス

45.5 × 33.5

青森県立美術館蔵 *1

《マリヤ・声なき人々の群れ A》

1966年

油彩・板

92.2 × 56.1

青森県立美術館蔵

《インデオたちの折り》

1966年

油彩・板

(右) 108.0 × 81.8

(左) 107.7 × 80.9

青森県立美術館蔵

《惱めるヨハネ》

1972年頃

油彩・板

66.5 × 30.9

青森県立美術館蔵

《埋められたヨハネ》

制作年不詳

油彩・合板

147.8 × 53.5

世田谷美術館蔵

《マリヤとインデオ》

1966年

油彩・板

91.8 × 68.9

青森県立美術館蔵

《キリスト (ピエタ)》

1966年

油彩・板

61.4 × 39.2

青森県立美術館蔵 *1

《キリスト》

制作年不詳

油彩・板

38.0 × 45.5

青森県立美術館蔵 *1

《マリヤ》

1972年

油彩・キャンバス

145.2 × 112.2

青森県立美術館蔵

《おとこ・おんな》

制作年不詳

油彩・板

52.1 × 61.3

青森県立美術館蔵

《ちち はは》

制作年不詳

油彩・板

47.0 × 63.2

青森県立美術館蔵 *1

《女と子供》

1971年

油彩・板

87.2 × 50.0

青森県立美術館蔵

《教会の見える風景》

1961年

油彩・板

50.8 × 60.3

青森県立美術館蔵

《グアダルッペの祭り》

1966年頃

油彩・板

46.8 × 65.4

青森県立美術館蔵

《グアダルッペの祭り》

1961年

油彩・板

48.5 × 87.0

青森県立美術館蔵

《グアダルッペの火の祭》

1962年

油彩・板

43.8 × 91.5

弘前市立博物館蔵

《グアダルッペの火祭り》

1961年

油彩・板

40.0 × 91.5

個人蔵

《ミイラ・声なき人々の群れ B》

1969年

油彩・板

114.3 × 76.5

青森県立美術館蔵

《埋められた人々 A》

1969年

油彩・板

142.8 × 79.5

青森県立美術館蔵

《埋められた人々 B》

1969年

油彩・板

113.2 × 69.7

青森県立美術館蔵

《折り (2人)》

1969年頃

油彩・板

39.5 × 27.0

青森市中世の館蔵

《ミイラたち》

制作年不詳

油彩・板

33.0 × 24.5

青森県立美術館蔵 *1

《ミイラ達》

1970年

油彩・板

37.5 × 45.5

青森県立美術館蔵

《ミイラたち》

1971年

油彩・板

38.0 × 45.3

青森県立美術館蔵 *1

《ミイラ》

1963年

油彩・板

69.3 × 113.9

青森県立美術館蔵

《ざんげ》

1965年

油彩・板

40.0 × 29.2

個人蔵

《野仏》

1966年頃

油彩・板

55.2 × 90.3

青森県立美術館蔵 *1

《野地蔵》

1956年

油彩・板

43.7 × 28.0

青森県立美術館蔵 *1

《野豚の花》

1972年

油彩・板

38.2 × 46.0

青森市中世の館蔵

《月下》

1970年代

油彩・板に麻布

46.0 × 53.5

青森県立美術館蔵

《流木》

1972年頃

油彩・板

24.3 × 33.5

青森県立美術館蔵 *1

《流木》

1972年頃

油彩・板

24.3 × 33.5

青森県立美術館蔵 *1

《流木の浜》

1962年

油彩・板

34.0 × 43.0

弘前市立博物館蔵

《流木》

1972年

油彩・板

68.5 × 103.0

青森市中世の館蔵

《流木》

1972年

油彩・板

65.0 × 102.5

青森市中世の館蔵

《流木》

1972年

油彩・板

67.0 × 99.0

青森市中世の館蔵

第2章 故郷と家族

《自画像》

1947年

油彩・板に麻布

41.1 × 32.7

青森県立美術館蔵

《「由利子」》

制作年不詳

木炭・紙

12.0 × 8.9

青森市中世の館蔵

《「自画像」素描》

制作年不詳

ペン・紙

14.0 × 9.0

青森市中世の館蔵

《夫人像》

1942年

油彩・キャンバス

79.5 × 64.5

青森県立美術館蔵

《娘の顔》

1949年

油彩・板

45.5 × 38.0

青森県立美術館蔵

| | | | |
|--|---|---|--|
| 《田園》 1939年頃 油彩・板 60.9×72.6 青森県立美術館蔵 *1 | 《小さき埋葬》 1939年 油彩・板 46.0×65.0 栃木県立美術館蔵 | 《牛》 1968年 油彩・板 91.5×168.0 青森市中世の館蔵 | 《アマポーラ》 1971年頃 油彩・板 57.5×31.5 個人蔵 |
| 《田代高原》 制作年不詳 油彩・キャンバス 45.6×53.3 青森県立美術館蔵 | 第3章 愛するものたち ～様々な主題 | 《あざみ》 1948年 油彩・キャンバス 65.0×79.5 青森市蔵 | 《椿》 制作年不詳 着彩（油彩）・板に紙 66.3×34.0 青森県立美術館蔵 *1 |
| 《海辺にて（青森）》 制作年不詳 油彩・板 28.0×55.0 青森県立美術館蔵 | 《自画像》 1947年 油彩・板 40.5×24.5 青森県立美術館蔵 *1 | 《薊》 1969年 油彩・板 43.0×34.7 青森県立美術館蔵 *1 | 《麦畑風景》 1961年 油彩・板 61.0×44.0 青森県立美術館蔵 |
| 《津軽野》 1971年 油彩・板 14.0×21.0 青森県立美術館蔵 | 《鴉》 1961年 油彩・板 53.0×65.5 青森市中世の館蔵 | 《薊》 1971年 油彩・板 22.8×16.0 青森県立美術館蔵 *1 | 《麦》 制作年不詳 油彩・板 33.5×24.0 青森県立美術館蔵 *1 |
| 《十和田湖》 1969年 油彩・板 52.6×72.5 青森県立美術館蔵 | 《カラス》 1972年 油彩・板 92.0×183.0 個人蔵 | 《あざみ》 1952年 油彩・板 33.0×24.5 個人蔵 | 《麦》 1949年頃 油彩・板 44.0×52.5 個人蔵 |
| 《ねぶた》 1968年頃 油彩・板 36.5×44.5 個人蔵 | 《秋鴉》 1939年頃 油彩・板 90.5×116.5 青森市立橋本小学校蔵 | 《菜の花》 制作年不詳（1940年代？） 油彩・板 41.0×52.8 個人蔵 | 《樹立》 1968年 油彩・板 52.8×45.5 青森県立美術館蔵 |
| 《海上運行》 1968年 油彩・板 24.0×33.0 青森市蔵 | 《浪と鳥》 1972年 油彩・キャンバス 130.5×162.5 青森市中世の館蔵 | 《菜の花》 制作年不詳 油彩・板 38.0×46.0 青森県立美術館蔵 *1 | 《黎明》 1970年代 油彩・板 46.0×53.5 青森県立美術館蔵 |
| 《獅子舞い》 1965年 油彩・合板 41.0×32.0 世田谷美術館蔵 | 《鳥一羽》 1961年 着彩・紙 174.2×174.0 弘前市立博物館蔵 | 《菜の花》 制作年不詳 油彩・板 45.0×53.0 青森市中世の館蔵 | 《樹木》 制作年不詳 油彩・板 38.0×46.0 青森県立美術館蔵 *1 |
| 《ふるさとのおやまさんけい》 1970年 油彩・合板 30.0×41.0 世田谷美術館蔵 | 《鳥》 1949年 着彩・紙 169.7×365.2 青森市中世の館蔵 | 《花》 1959年 油彩・板 91.3×49.0 青森県立美術館蔵 | 《樹木》 制作年不詳 油彩・板 44.0×26.0 青森県立美術館蔵 *1 |
| 《馬そりに乗る母子》 1972年 油彩・板 22.0×45.5 青森県立美術館蔵 | 《襖絵「鴉と蓮」》 1965年頃 油彩・布 各166.5×78.5（10点） 青森市中世の館蔵 | 《花》 1950年 油彩・板 33.5×24.0 青森市中世の館蔵 | 《樹立》 制作年不詳 油彩・板 46.0×38.5 青森県立美術館蔵 *1 |
| 《埋葬》 1968年 油彩・板 各91.5×182.7 栃木県立美術館蔵 | 《野牛》 1971年 着彩（油彩）・板に紙 168.7×333.0 青森県立美術館蔵 | 《花》 1971年頃 油彩・板 58.5×32.5 個人蔵 | 《風景》 制作年不詳 油彩・板 32.5×23.2 青森県立美術館蔵 |

| | | | |
|---|---|--|--|
| 《樹木》 制作年不詳 油彩・板 21.3 × 41.5 青森県立美術館蔵 *1 | 《船》 1971 年 油彩・板 44.6 × 53.4 青森県立美術館蔵 *1 | 《鯉》 制作年不詳 油彩・板 10.7 × 18.5 青森県立美術館蔵 *1 | 《ブハラにて》 1969 年 油彩・板 24.5 × 33.0 個人蔵 |
| 《風の日に》 1967 年 油彩・板 31.5 × 41.0 個人蔵 | 《海にて》 1970 年頃 油彩・板 31.5 × 40.5 個人蔵 | 《蓮池》 1939 年頃 油彩・板 37.8 × 45.0 青森県立美術館蔵 | 《シルクロードの老人たち》 1971 年 油彩・板 37.5 × 45.0 青森県立美術館蔵 |
| 《高尾にて》 1972 年 油彩・板 53.5 × 46.0 青森県立美術館蔵 *1 | 《猫》 1953 年 油彩・板 27.0 × 44.8 青森県立美術館蔵 *1 | 《少女像》 1948 年 油彩・キャンバス 72.7 × 50.7 青森県立美術館蔵 | 《捕らわれ人》 1967 年 ブロンズ 高さ 13.5 青森県立美術館蔵 |
| 《高尾にて》 1972 年頃 油彩・板 38.3 × 46.3 青森県立美術館蔵 *1 | 《猫》 制作年不詳 油彩・板 14.0 × 21.0 青森県立美術館蔵 | 《少女像》 1941 年 油彩・板 33.5 × 24.0 青森県立美術館蔵 | 第 4 章 海を見る詩人 ～太宰治、山岸外史、 文学者たち |
| 《呑み横丁》 1949 年 油彩・板 32.8 × 23.9 個人蔵 | 《猫》 1961 年 油彩・板 39.0 × 47.5 青森市中世の館蔵 | 《バーにて》 1970 年 油彩・板 31.4 × 24.0 青森県立美術館蔵 *1 | 《海を見る詩人》 1970 年 油彩・板 青森県立美術館蔵 |
| 《停車場》 制作年不詳 油彩・ボードキャンバス 23.7 × 33.0 青森県立美術館蔵 *1 | 《赤い猫》 1954 年 油彩・板 33.3 × 50.7 青森県立美術館蔵 *1 | 《支える》 1970 年 油彩・板 53.0 × 45.0 青森県立美術館蔵 *1 | 《或日の詩人》 1954 年 油彩・板に麻布 青森県立美術館蔵 |
| 《風景》 1952 年 油彩・板 41.5 × 32.2 青森県立美術館蔵 *1 | 《猫》 1971 年 油彩・キャンバス 15.6 × 22.6 青森県立美術館蔵 *1 | 《裸婦》 1946 年 油彩・板 24.8 × 41.0 青森県立美術館蔵 *1 | 《詩人の顔》 1968 年 油彩・合板 世田谷美術館蔵 |
| 《よいどれ》 1948 年 油彩・板 51.7 × 65.0 青森県立美術館蔵 *1 | 《馬》 制作年不詳 油彩・板 24.5 × 33.0 青森県立美術館蔵 *1 | 《裸婦》 1950 年 油彩・板 41.0 × 32.0 青森市中世の館蔵 | 《山岸外史》 1970 年 油彩・板 青森市中世の館蔵 |
| 《船》 1967 年 油彩・板 16.0 × 36.5 青森市中世の館蔵 | 《雉子》 1949 年 油彩・板 45.0 × 69.0 青森県立美術館蔵 | 《裸婦》 制作年不詳 油彩・板 33.5 × 24.0 青森県立美術館蔵 *1 | 《秋田雨雀》 制作年不詳 鉛筆・コンテ・紙 青森市中世の館蔵 |
| 《船》 制作年不詳 油彩・板 14.4 × 50.5 青森県立美術館蔵 | 《くんせい》 1966 年 油彩・板 91.5 × 31.0 青森市中世の館蔵 | 《「裸婦」素描》 1949 年頃 鉛筆・紙 18.0 × 13.0 青森市中世の館蔵 | 《淡谷悠蔵「薊」挿絵》 1951 年 ペン、水彩・紙 青森市中世の館蔵 |
| 《あらしを越えて》 1969 年 油彩・板 42.0 × 81.5 青森市中世の館蔵 *1 | 《燻製》 制作年不詳 油彩・厚紙に麻布 23.6 × 32.4 弘前市立博物館蔵 | 《テーブルの男達》 制作年不詳 油彩・板 41.0 × 31.8 青森県立美術館蔵 *1 | 《阿部合成装丁による書籍》 青森市中世の館蔵 《太宰治碑のための素描（スケッチブック）》 1965 年 鉛筆・紙 青森県立美術館蔵 |

第5章 メキシコ、サーカス、道化

| | | | |
|---|---|--|--|
| 《自画像》 1960年 油彩・板 120.2×64.4 青森県立美術館蔵 | 《子牛》 1964年 油彩・墨・板に紙 36.5×40.0 青森県立美術館蔵 | 《鶏をもつ少年》 1961年 油彩・板 64.0×37.0 青森県立美術館蔵 | 《闘牛》 制作年不詳 油彩・板 32.0×41.0 青森県立美術館蔵 *1 |
| 《林の中のカラス》 1960年 油彩・板 120.2×65.0 青森県立美術館蔵 | 《裸婦》 1964年 油彩・板 73.0×51.0 青森県立美術館蔵 | 《街の女（メキシコにて）》 制作年不詳 油彩・板 41.0×25.3 青森県立美術館蔵 *1 | 《闘牛・終曲》 1961年 油彩・板 33.0×75.0 青森市中世の館蔵 |
| 《黒い牛》 1960年 着彩・板に紙 63.0×91.0 青森県立美術館蔵 | 《KODACHI》 1964年 油彩・キャンバスボード 61.0×39.0 青森県立美術館蔵 | 《人 教会》 制作年不詳 油彩・板 40.3×29.0 青森県立美術館蔵 *1 | 《闘牛》 1970年 油彩・板 46.4×91.5 青森県立美術館蔵 |
| 《あざみ》 1964年 油彩・板に紙 75.6×82.6 青森県立美術館蔵 | 《チャバス村 レスミデロの谷間の急流》 1964年 油彩・板 71.2×61.2 青森県立美術館蔵 | 《ゾチミルコの花売り》 1963年頃 油彩・板 15.8×22.7 個人蔵 | 《ギニョール操り人形》 1960年 油彩・板に麻布 40.0×32.0 弘前市立博物館蔵 |
| 《火の神、水の神》 1964年 油彩・板に紙 172.2×170.0 青森県立美術館蔵 | 《カリブ海にて》 1959年 油彩・板 32.3×41.0 弘前市立博物館蔵 | 《メキシコにて 田舎》 制作年不詳 油彩・板 33.5×24.1 青森県立美術館蔵 *1 | 《チャロ》 1963年 油彩・板 33.5×24.5 青森市中世の館蔵 |
| 《すすき》 1964年 油彩・板に紙 57.0×73.7 青森県立美術館蔵 | 《メキシコにて》 1964年 油彩・板 49.8×53.5 青森県立美術館蔵 *1 | 《土偶》 1961年 油彩・板 49.5×28.5 青森県立美術館寄託 | 《ピカドール》 1960年 油彩・板 46.0×38.0 弘前市立博物館蔵 |
| 《野火》 1964年 油彩・板に紙 70.1×83.0 青森県立美術館蔵 | 《ペルーの木》 1972年 油彩・板 52.0×45.5 青森市中世の館蔵 | 《マリアッチ》 1961年 油彩・板 32.0×41.0 弘前市立博物館蔵 | 《赤と黒》 1961年 油彩・板 45.5×61.5 青森県立美術館蔵 |
| 《猫と柳》 1964年 油彩・板に紙 61.0×73.2 青森県立美術館蔵 | 《風船売り》 1961年 油彩・板 76.0×32.0 青森市中世の館蔵 | 《闘牛》 制作年不詳 油彩・板 37.5×45.5 青森県立美術館蔵 | 《黒と赤》 1962年 油彩・板 53.5×64.0 弘前市立博物館蔵 |
| 《海辺》 1964年 油彩・キャンバスボード 44.0×71.0 青森県立美術館蔵 | 《風船売り》 1960年 油彩・板 96.7×44.5 青森県立美術館蔵 | 《闘牛》 1962年 油彩・板 33.3×45.6 青森県立美術館蔵 *1 | 《闘牛》 1959年 着彩（油彩）・紙 172.0×245.0 青森県立美術館寄託 |
| 《裸婦》 1964年 墨・紙 36.5×25.5 青森県立美術館蔵 | 《店じまい（メキシコ）》 制作年不詳 油彩・板 51.3×30.5 青森県立美術館蔵 *1 | 《闘牛》 1962年 油彩・板 33.0×66.8 青森県立美術館蔵 *1 | 《踊る馬》 1971年 油彩・板 121.0×90.0 青森市中世の館蔵 |
| | 《赤いマフラーの女》 制作年不詳 油彩・板 50.0×23.5 青森県立美術館蔵 *1 | 《闘牛》 制作年不詳 油彩・板 31.0×41.0 青森県立美術館蔵 *1 | 《道化、前駆する》 1970年 油彩・板 90.3×134.8 青森県立美術館蔵 |

| | | | |
|--|---|---|--|
| 《ブランコの道化》 1969年 油彩・板 110.5 × 57.7 青森県立美術館蔵 *1 | 《サーカス》 制作年不詳 油彩・板 49.0 × 17.8 青森県立美術館蔵 *1 | 《道化》 制作年不詳 油彩・板 22.7 × 15.7 青森県立美術館蔵 *1 | 《連作：海の群像（常田健との合作）》 「延縄を引く漁師」 「水揚げ」 「船揚げ機をまく人々」 「鯨をかつぐ人々」 「魚市場の風景」 1936年 油彩・漆喰 青森県立郷土館蔵 |
| 《メキシコ（人々）》 制作年不詳 油彩・板 82.5 × 53.0 青森県立美術館蔵 *1 | 《曲芸》 1969年 油彩・板 16.0 × 23.0 青森県立美術館蔵 *1 | 《道化 ポリショイサーカスにて》 1967年 油彩・板 34.0 × 24.0 青森県立美術館蔵 | 《顔》 1937（1935？）年 油彩・キャンバス 63.5 × 48.5 東京都現代美術館蔵 |
| 《サーカス》 1949年 油彩・板 50.0 × 60.5 青森県立美術館蔵 *1 | 《曲芸》 制作年不詳 油彩・板 183.2 × 20.0 青森県立美術館蔵 | 《自画像》 1936年 油彩・キャンバス 65.5 × 45.8 神奈川県立近代美術館蔵 | 《見送る人々》 1938年 油彩・板 137.4 × 165.6 兵庫県立美術館蔵 |
| 《檻の中》 1953年頃 油彩・キャンバス 59.0 × 86.6 個人蔵 | 《ブランコの道化》 1969年 油彩・板 63.0 × 49.9 青森県立美術館蔵 | 《農夫》 1937年 油彩・キャンバス 60.7 × 41.1 青森県立美術館蔵 | 《野ざらしA（軍歌）》 1971年 油彩・板 34.5 × 67.5 青森県立美術館蔵 *1 |
| 《空中ブランコ 女》 1970年 油彩・板 72.0 × 42.5 青森県立美術館蔵 *1 | 《風船と道化》 1970年 油彩・板 61.3 × 39.0 青森県立美術館蔵 *1 | 《鯨をかつぐ人》 1937年頃 油彩・板 （右）158.4 × 169.7 （左）158.2 × 169.6 神奈川県立近代美術館蔵 | 《シベリアの想い出に》 制作年不詳 油彩・板 23.6 × 33.0 青森県立美術館蔵 *1 |
| 《空中ブランコ》 1957年 油彩・キャンバス 91.0 × 53.3 青森県立美術館蔵 *1 | 《ピエロ》 1969年 油彩・合板 33.0 × 24.5 青森県立美術館蔵 *1 | 《「百姓の昼寝」下絵》 1937年頃 ペン・紙 29.5 × 23.2 青森市中世の館蔵 | 《前夜（太平洋戦争）》 制作年不詳 油彩・合板 59.2 × 136.0 世田谷美術館蔵 |
| 《サーカス》 1969年 油彩・板 65.0 × 46.8 青森県立美術館蔵 *1 | 《笛を吹くピエロ》 1970年 油彩・キャンバス 41.5 × 32.5 青森市中世の館蔵 | 《「農民」デッサン》 1939年頃 ペン、水彩・紙 13.8 × 21.0 青森市中世の館蔵 | * 1 平成23年度長谷井夫妻より寄贈 |
| 《サーカス》 1971年頃 油彩・板 33.0 × 24.5 個人蔵 | 《ピエロ》 1972年 油彩・キャンバス 22.7 × 15.7 青森県立美術館蔵 | 《「農民」デッサン》 1939年頃 ペン、水彩・紙 13.8 × 21.0 青森市中世の館蔵 | |
| 《サーカス（一輪車）》 1963年 油彩・キャンバス 45.0 × 37.5 青森県立美術館蔵 *1 | 《顔》 制作年不詳 油彩・板 23.0 × 15.5 青森県立美術館蔵 *1 | 《「農民」デッサン》 1939年頃 ペン、水彩・紙 17.7 × 10.9 青森市中世の館蔵 | |
| 《玉のり》 1970年 油彩・板 60.5 × 50.3 青森市中世の館蔵 | 《ピエロ》 制作年不詳 油彩・板 33.3 × 24.5 青森県立美術館蔵 *1 | | |
| 《サーカス》 1970年 油彩・板 81.5 × 33.5 青森市中世の館蔵 | 《ピエロ》 1969年 油彩・板 33.0 × 24.5 青森県立美術館蔵 | | |

第6章 『見送る人々』と 壁画の夢

掲載記事

函館新聞社

2020年12月5日
「暮らしアクセス」情報欄 阿部合成展紹介

毎日東京本社新聞

2021年1月5日～25日
美術館・博物館ガイド

陸奥新報社

2020年10月15日
阿部合成 生誕110周年、県美で初の回顧展
過去最大 生涯を網羅

2020年11月29日

阿部合成「広く知って」生誕110周年で
県美初回顧展晩年までの200点展示

朝日新聞

2020年12月16日
美術館・博物館表

2021年1月19日
顔だけで伝えたかったのは「見送る人々」
阿部合成

河北新報社

2020年11月25日
東北の美術館・博物館12月

2020年12月3日
画家の阿部合成生誕110年企画展
青森県立美術館

津軽新報社

2020年12月10日
阿部合成展紹介

東奥日報社

2020年10月21日
「愛の画家」側面に焦点 県美 来月から
阿部合成展

2020年11月29日
「愛の画家」鎮魂と祈り 県美 阿部合成展
始まる

2020年12月13日
RAB 社告枠掲載 阿部合成展開催情報

2020年12月22日
「愛」の画家 阿部合成（中）「鳥」
日本画の素養生かす

2020年12月23日
「愛」の画家 阿部合成（下）「埋葬」
声なき人々への共感

2021年1月14日
寄稿 父・合成生誕110周年に寄せて
阿部 和唐 濁りのない精神の深さ

2021年1月24日
RAB 社告枠掲載 阿部合成展開催情報

令和2年度コレクション展 Permanent Exhibition 2020

通年展示

展示室 F、G：

(1期-2期) 奈良美智 1985-2019 - 新寄託作品を中心に

(3期-4期) 奈良美智 30年間のあゆみ 1989-2019

国内外で活躍する青森県出身の美術作家・奈良美智は、挑むような目つきの女の子の絵や、ユーモラスでありながらどこか哀しげな犬の立体作品などで、これまで若い世代を中心に、多くの人の心をとらえてきた。青森県立美術館では、開館前の1998年から奈良美智作品の収集を始めており、現在170点を超えるそのコレクションに2020年3月から絵画やドローイング、ブロンズなど、作家からの寄託作品24点があらたに加わった。中には画家・杉戸洋とのウィーンでの共同制作による絵画(2004年)や、北海道白老町にある集落、飛生(とびう)での滞在と同地のコミュニティとの交わりから生まれた近年の作品が含まれる。今年度の通年展示では上半期と下半期で展示作品を一部変更しながら、当館収蔵の初期作品から新規に寄託された新作まで、奈良美智の実に豊かな創造の歩みを紹介した。

アレコホール：マルク・シャガールによるバレエ「アレコ」の舞台背景画

青森県立美術館の中心には、縦・横21m、高さ19m、四層吹き抜けの大空間が設けられている。アレコホールと呼ばれるこの大きなホールには、20世紀を代表する画家、マルク・シャガール(1887-1985)によるバレエ「アレコ」の背景画が展示される。青森県は1994年に、全4作品から成るバレエ「アレコ」の舞台背景画中、第1幕、第2幕、第4幕を収集した。これらの背景画は、帝政ロシア(現ベラルーシ)のユダヤ人の家庭に生まれたシャガールが、第二次世界大戦中、ナチス・ドイツの迫害から逃れるため亡命していたアメリカで「バレエ・シアター(現アメリカン・バレエ・シアター)」の依頼で制作したものである。大画面の中に「色彩の魔術師」と呼ばれるシャガールの本領が遺憾無く発揮された舞台美術の傑作である。

残る第3幕の背景画《ある夏の午後の麦畑》は、アメリカのフィラデルフィア美術館に収蔵され、西側エントランスに展示されていたが、同館改修工事に伴い、2017年4月から4年間の長期借用が認められることになった。青森県立美術館での「アレコ」背景画全4作品の展示は、2006年の開館記念で開催された「シャガール『アレコ』とアメリカ亡命時代」展以来である。背景画全4作品が揃ったこの貴重な機会に、あらためてシャガールの舞台美術作品の魅力を広く伝えた第3幕は、2021年4月に2年間の借用期間延長が認められ、現在も当館に展示されている。

アレコ特別鑑賞プログラム

高さ約19メートルの大ホールに展示された「アレコ」背景画に舞台用の照明をあて、音楽とともにバレエのステージを彷彿とさせる演出を加えながら、作品制作の背景、バレエのストーリーなどをナレーションで紹介する約15分間の鑑賞プログラムを、開館中、定時で上映した。

上映時間：① 10:30 - ② 12:00 - ③ 13:30 - ④ 15:00 -

コレクション展 2020-1:「春」を刻む

2020年3月20日(金・祝) - 7月12日(日)

「春」をテーマに展示を構成。季節や生きものの成長する様子、新しい時代の幕開けといった様々な意を含む「春」。そんな「春」に寄せて、棟方志功の版画家としての芽生えを示す作品、成田亨のウルトラ怪獣のデザイン原画、シュルレアリスムを代表する芸術家ダリの版画作品の連作、濱田庄司の民藝作品、五所川原市教育委員会寄託による青森の子どもたちの手による版画作品の数々を紹介した。

展示室 H | 青森の教育版画：花と小鳥と太陽と

戦後の図工教育の現場において版画への関心が全国規模で高まりを見せた時期があり、中でも青森における「教育版画」の実践は、従来からの版画への関心の高さも相まって、実に多様な展開を示す。海や山にまつわる仕事。村の開拓の歴史。米作りの日々。地域に根ざした記憶と記録を集め、想像力を自由に広げ、丁寧につくられた様々な版画作品の数々。それらについて県下教育版画の代表的な指導者の一人である坂本小九郎は、「子どもたちの表現する版画は、風土と歴史と人間を鏡のように忠実に映し出す」と言う。ならば子どもたち自身の手で描かれ・彫られ・刷られる版画の一枚一枚は、そのまま地域社会と子どもたちの成長のひと時を刻むものであり、人がこの土地に在ろうとする意志の一片である。

今回は青森の小学生・中学生の版画作品のうち、教育版画の普及につとめた教育者・大田耕士(1909-1998)が集め、現在五所川原市教育委員会が所蔵する中から県立美術館にご寄託いただいている中から花や小さな生き物をモチーフにした作品、子どもたちや地域の成長を感じさせる作品を紹介した。集落の発達や、生命の故郷たる海に抱かれ船が導く、万物が共存するイメージの大海原、そこに咲く色とりどりの花々…。画面に宿るファンタジーの緻密さ壮大さに私たちは圧倒されるが、そうして生まれた作品の奥底にあるのは、子どもたちが日常をとおして他者や世界にふれた時の小さな感動であることを忘れてはならない。それに気づいた時、子どもにも大人にも、それぞれの心の中には「春」という名の成長の兆しがいづつも確かに息づいている。

展示室 I | 棟方志功：芽萌える春

ゴッホに憧れ油絵を描き始めた棟方志功は、1924年本格的に絵を学ぶために上京。帝展入選をめざしたが、4年連続落選している間に版画家・川上澄生の《初夏の風》に感銘を受け、1927年には版画作品を試みた。初期の版画作品は、ドレスを着た貴婦人や星座など西洋趣味的な題材を用いたり、文字を彫り込んだり、また、《星座の花嫁》《桃真盛り》など色数に違いはあるものの、多色摺り版画を試みたりするなど川上澄生の影響が見られる。油絵の制作も続けていた棟方は1928年、ようやく帝展入選を果たしますがその頃には油絵の在り方に疑問を持つようになり、日本人なのだから日本から生まれ切れる仕事、ゴッホも高く評価した木版画で自分の世界をもちたいと版画の道に

進んでゆく。

今回は油絵画家をめざしていた棟方が版画に惹かれ、迷いながらも進んでいった初期の版画作品、そしてちょうどその頃に描いた油絵《庭》も展示。《庭》は平成30年度に受贈した作品で、このたび修復作業を終え初公開となる。また、郷土青森の12か月の風物を鮮やかに描いた倭画や、花札の図柄に興味をもっていったことから好きな花々や木々を動物と組み合わせ、装飾的で華やかに四季を描いた版画作品など、春の訪れを感じさせるような生命力あふれる作品も紹介した。(本章のみ構成：棟方志功記念館)

展示室 J | 松下千春、サルバドール・ダリ、濱田庄司：「春」を刻む

寒さが和らぎ、土の中から這い出てくる虫たちに春を謳歌するさまを連想するように、松下の版画集《葉蔭》における小さな生き物たちは、現実以上の親密な存在として私たちの眼前に現れる。この「現実以上の親密さ」をもとに、ダリの版画集《シュルレアリスムの思い出》に収められた12枚を見てみよう。天使、バラ、粒子、蝶、眼、肖像、細長く引き伸ばされた肢体、古典絵画への関心、狂気、松葉杖…。本作においてはダリが長年親しんできた事物が再解釈され、多義的な象徴性を付与される。このようなイメージの輪廻転生においては、おそらく繰り返されることそれ自体に超現実(シュルリアル)としての「春」、すなわちいつの時代も瑞々しい作家の感性がひそんでいる。一方で濱田の仕事に目を転じてみよう。釉薬のかけ方の神がかり的な速さを指摘され、「15秒プラス60年(15秒の施薬の背後には60年分の仕事がある)」と返してみせた濱田。そんな濱田の花生は、植物としての花が生けられることの背後に、長大な試行の果て、感性と技術の一致するところに現れる賜物を、束の間この世界に留めておくための機能を備えている、と言えるのではないかと。鑑賞者自身がこの世界の中で生きるべき「春」、想像と創造の〈あいだ〉から見つけることが提唱された展示である。

展示室 K | 成田亨：鬼と怪獣

成田亨(1929-2002)は、「ウルトラマン」、「ウルトラセブン」という初期ウルトラシリーズのヒーロー、怪獣、宇宙人、メカをデザインし、日本の戦後文化に大きな影響を与えた彫刻家兼特撮美術監督である。

成田は神戸市に生まれ、直後に青森県へ移った。旧制青森中学(現青森高等学校)在学中に画家・阿部合成と出会い、絵を描く技術よりも「本質的な感動」を大切に考える考え方を、さらに彫刻家の小坂圭二から対象物の構造や組み立て方、ムーブマンを重視する方法論を学んだ後、武蔵野美術学校(現武蔵野美術大学)西洋画科へと進学。当初は油彩画を専攻していたが、「地面から立ち上がるようなデッサンを求める」(成田)ため3年次に彫刻科へ転科。具象性を維持しつつもフォルムを自在に変容させ、動的かつ緊張感ある構成を作り上げていくという成田芸術の基礎がここで形づくられた。武蔵野美術学校研究科に在籍していた1954年、成田は人手の足りなかった「ゴジラ」の

製作に参加、そこで円谷英二と出会い、以降特撮美術の仕事も数多く手がけるようになる。1965年、東宝撮影所で円谷英二と再会し、「怪獣のデザインはすべて自分がやる」という条件のもと「ウルトラQ」の2クールから制作に参加し、以降「ウルトラマン」、「ウルトラセブン」までのシリーズに登場するヒーロー、怪獣、宇宙人、メカニック等のデザインを手がける。放映に際し、「これまでになかったヒーローの形を」という脚本家・金城哲夫の依頼を受けた成田は、ウルトラマンのデザインを純粹化という「秩序」のもとに構築し、対する怪獣のデザインには変形や合成といった「混沌」の要素を盛り込んでいく。美術家としての高い感性によってデザインされたヒーロー、怪獣は、モダンアートの成果をはじめ文化遺産や自然界に存在する動植物を引用して生み出される形のおもしろさを特徴とする。誰もが見覚えのあるモチーフを引用しつつ、そこから「フォルムの意外性」を打ち出していくというその一貫した手法からは成田の揺らぐことのない芸術的信念を紹介する展示となった。

○関連企画

担当学芸員によるギャラリートーク

展示解説を美術館 YouTube チャンネル上で公開

講師：奥脇嵩大（県立美術館学芸員）

【URL】 <https://youtu.be/PRWAOpVHYnk>



「青森の教育版画：花と小鳥と太陽と」 展示風景

コレクション展 2020-2：この世界と私のあいだ 2020年7月18日（土）－9月6日（日）

「この世界と私のあいだ」をテーマに様々な「あいだ（境界）」をつなぐ芸術の力に着目して展示を構成。芸術家はこれまで自然の色を再現する色彩分割、三次元空間を平面に置き換える遠近法のように、事物の「あいだ」を操る術を開発してきた。本展ではそんな芸術家の仕事を、現実をはかり・組みかえ・交わらせ、まだ見ぬ世界と様々に関係しようとするアートとして広義に読みかえ、人が生きるべき「これからの距離」について考察を加えた。

また芸術や美術館をさらに身近に感じてもらうことを目指した特別プログラム「みんなで楽しむ美術館」を同時開催。知識によらない作品紹介や光の組み合わせをもとに色の成り立ちを体感するコーナーなどを常設展会場内に展開した。

展示室 A | 1. 精神と物質のあいだで：斎藤義重、高松次郎

「この世界と私のあいだ」は、斎藤義重と高松次郎の作品の紹介からはじまる。制作における精神（思考）と物質の展開可能性を追求し、ともに空間全体で作品を機能させる芸術のあり方「インスタレーション」の日本における初期の担い手である斎藤と高松。両者の作品の相似／相違をもとに、思考と物質が連続して働く展示空間をつくることで、世界との距離を考える本展の導入とした。

高松 …僕自身、非常に考えてきたつもりの問題として「自己の白紙還元」というものがあるんです。（中略）…僕が考えるのは自分自身をできるだけ白紙化して、もう一度自分やいろいろな存在や世界といったものを新しい眼で見直してみようということなんです。

斎藤 …発表するような作品を作ると同時に、すぐその側から不満足な要素が発生するわけです。これは誰でもそうでしょうが、プラスの面もあるけれど、同時にマイナスの面もある。変な言い方だけれど、このプラス、マイナスの中間に空白のさけめがあるんで、その空白のゼロみたいな地点が自分のいるところだろうと思えますね。

上記は両氏の対談記事^(*)からの引用であり、それぞれの世界認識のあり方や制作のスタンスが端的に示される。高松の「白紙化」と斎藤の「空白のさけめ」。一見して似通っているが、高松が自己認識の更新を制作とつなげようとするのに対して、斎藤は自己と世界の地続き的な領域で制作を行う。ここに対談中で高松が一度だけ言及する「永久革命」を手がかりとして加えれば、やや大げさな言い方ではあるが、両者が問題にしているのは制作態度としての「革命か生活か」とすることもできるだろう。ここに津村喬がかつて『戦略とスタイル』（1971）で示した「『日常生活における管理と脱管理の、支配者のスタイルの模倣と脱出者のスタイルとの闘争』が永続的に続いている」^(**)ことを考え合わせるならば、両者の作品は人が現状から未来に向けて生を獲得しなおすための余地とすることができる。ここ

にあるのが、たとえそれ自体では意味をもたない点や線、影、材の集積であったとしても。そうしたものがひと時思考され、空間に連なっていること自体が、絶対的に重要だ。

- *1 高松次郎『斎藤義重と語る 対称は反対称を通して限りなく広がる』『みつゑ No.862』（美術出版社 / 1977）p.98-108
- *2 津村喬『革命のアルケオロジー 4 戦略とスタイル 増補改訂新版』（航思社 / 2015）p.23

展示室 B | 2. 「板画」と「絵画」：棟方志功

棟方志功が芸業（げいごう）と呼ぶ「板画」「倭画」「油絵」などの多岐にわたる棟方芸術について、棟方は、「板画」は呼吸そのものであり、「倭画」は筆が勝手に動き出し、「油絵」を描いているときが一番楽しいと話す。「板画」は公募展や国際展に出品し、板画家・棟方志功の評価がくだされる本業。作品には森羅万象への祈りや想いが込められ、様々な知識や技法を吸収しては独自の板画世界を切り開いた。一方「倭画」や「油絵」では緊張が解きほぐされ、時にユニークなモチーフや素早く伸びやかな筆致、鮮やかな色彩からものびのびとした精神性から生み出されていることが感じられる。棟方志功の「絵画」には本業の「板画」があるからこそ生み出される魅力と開放感が、「板画」には「絵画」の筆の仕事があるからこそ研ぎ澄まされる集中力と緊張感があった。「板画」と「絵画」、使う道具も描く技法も違うようで互いに影響を及ぼし合う相互関係がみられる。また棟方は制作時、画面すれすれまで近づいて勢い激しく彫刻刀や筆を運ぶ。幼い頃から極度の近視と弱視で、写生のときに見る風景もテレビも美術館も双眼鏡が手放せない。「生理学的な意味でわたくしの目は節穴同然だから、目を土台にしては仕事はできない。」と話し、写生をそのまま描き起こすことをせず、繰り返し写生をすることで自分のものにしたところの中の美を描く。そのように見えない目で絶えず接近し描かれたにもかかわらず、棟方の「絵画」は私たちが作品を鑑賞するときの距離で山や水の流れが浮かび上がる。こころの中の美を描く棟方ならではの制作時の物理的な距離を超越する描写は、線と面の芸術「板画」においても画中に文字を入れ、布置を大事にし装飾性を高め、自然を模様化するなど新たな可能性を生み出す。棟方志功の「板画」と「絵画」、精神的、物理的距離に着目して構成された展示。（本章のみ構成：棟方志功記念館）

展示室 C | 3. わたしをつくるもの：青森の教育版画、大小島真木+アグロス・アートプロジェクト、ケーテ・コルヴィッツ

青森の子どもたちが共同で制作した教育版画作品《黒土が消えるとき》、大小島真木が美術館での米作り体験をもとに県民と共同で制作した巨大絵画《明日の収穫》、ケーテ・コルヴィッツが戯曲『織工たち』をもとにした版画連作《織工の蜂起》を取り上げた。ともに個人と集団や、人・社会・自然の「あいだ」でつくられた作品をとおして、世界と「わたし」をつなぐ「つくること」について検討する展示。

…ケーテは別な箇所であっている。われわれを全面的に形成

陶冶するということが、われわれ自身にはうまくいかなかったら、われわれはあれかこれかを棄てなければならない。そうすれば、その棄てたものが他の者によって取り上げられ、続行されてゆくのを見る喜びを得よう。「こうして或る美しい感情が立ち現れてくるのだ。人類が一緒になって初めて真の人間というものが存在するのであり、個々人は、彼が全体のうちで自己を感じる勇気をもつ場合にのみ朗らかに幸福になりうるという」(*1)

上記文章はケーテ・コルヴィッツが1917年3月の日記に書き残した一節である。己を「陶冶」すなわち成長させる過程でなし得ないことを自覚し、その欠けた部分を他者にひらくことで、やがて至る世界の幸福について説くケーテを敬愛していたコルヴィッツ。本章の出品作品にはそんなコルヴィッツにはじまり、他者と交わり変容する「わたし」とその先の世界のありようが、調和と時に軋轢を伴いながら示されます。《織工の蜂起》にみる圧倒的な静けさを孕んだシュプレヒコール（群衆は各々叫んでいても会話は交わさない）。《黒土が消えるとき》にみる、人の自然破壊がもて住処を追われる動物たちの空虚な眼差しと、そこに併走しようとする人の子たち。農園が仮設された美術館という農耕と制作の「さけめ」の場所で、《明日の収穫》に描出された無秩序な秩序とでも言うべき生のうねり。見つめ飛び込むべき「さけめ」は今も世界のそこかしこで口を開けて、「わたし」を待ち続けている。幸福を求めて、そこに思いきって飛び込んでみるのも一興。ただし再び生まれ出た時、人は自らに角や牙の一本くらいは生えていることを覚悟しておいた方が良いのかもしれない。

*1 清真人・高坂純子『ケーテ・コルヴィッツ 死・愛・共苦』（お茶の水書房/2005）p.117-118

映像室 | 4. (芸術空間における) S.F.X の可能性：成田亨

彫刻家、特撮美術監督である成田亨の1960年代から80年代にかけての怪獣デザイン原画やS.F.X（特殊撮影 略称「特撮」）用の舞台セットなどを紹介し、同時代の斎藤義重や高松次郎らとは別角度から、世界を拡張させて捉える芸術を考える展示。『ウルトラQ』『ウルトラマン』『ウルトラセブン』の怪獣デザインの仕事で広く知られる成田。そのデザイン仕事は自然現象や芸術作品といった様々な要素を集め研究することから始まり、それらを組み合わせて抽象化させる（成田の言い方を借りれば「発酵させる」）ことで、鮮烈なイメージとフォルムの創出が追求される。その制作のあり方は、互いにかけてはなれた事物の出会いをもとに思いがけない関係性を生み出す「シュルレアリスム（超現実）」の芸術とつながるところがあり、空間を自在に操る四次元怪獣《ブルトン》や次元を超えて地球にやってくる宇宙人《ケムール人》などは、その代表的な作例である。

…映画はリアリズムを要求します。自然を再現するには遠近法が最適、というよりも、限られたステージ内での空間のリアリズム構成は遠近法しかありません…（中略）…絵画芸術で否定されてしまった遠近法が映画美術で生きるのは、映画は「実」の撮影だ

からで、セットは「実」らしくなければなりません…（中略）…特撮とは何か、の原点に返ってリアリズムを求めると、私は強遠近法しかないと思っています…（中略）…私は四次元のセット化、そして映画化を考え続けています(*1)

特撮仕事にも怪獣デザインの仕事が応用される点。そして写真や映像表現が発達し「死んだ」との向きすらあった絵画芸術を映画の中で再生させ、四次元をかたちにするという前人未踏の芸術表現に昇華させようとする点は興味深いところである。1960年代半ばの芸術の分野では、斎藤らの空間を大規模に用いた作品展開が生まれたほか、実験的な手法で意識の拡張を試みる映像表現「エクスパンデッド・シネマ」などが散見される。そうした空間と時間をまたいだ芸術上の実験を、成田は自身の映画仕事の中で、驚くべき密度で実践していたと言えるのではないか。少なくとも特撮美術という「サブ（下位）」に位置づけられがちな芸術分野を基点に芸術を信じ続け、絶えず発展させていこうとする成田の意志を前に心を震わせずにはいられない。2020年という時代に、美術館という芸術のための空間で特撮仕事を鑑賞することは、あなたにどのような経験をもたらすだろうか。

*1 成田亨『成田亨の特撮美術』（羽鳥書店/2015）p.183-198

展示室D | 5. 歩くことから始まる：リチャード・ロング、平田五郎

最終章では、リチャード・ロングが青森側から白神山地入りし、8日間単独歩行することから制作された写真とテキストによる作品、平田五郎のアラスカへの旅行体験を軸に現地での彫刻制作、神話調査をもとに写真とテキストなどから構成された作品を紹介した。土地への幽（かそ）けき身体的介入をもとに世界を想像しなおそうとする両者の作品を見比べる展示構成は、人が芸術家であるなしに関わらず、自らのうちに自己や世界と向き合うための術をつかむことにつながることとなった。

歩行とは空間と自由の表現である。それは他人の想像力のなかでも存在しうるもので、それ自体がまたあらたな空間でもある(*1)

ロングは様々な場所を歩行し、石や木、泥といった自然素材を用いて作品を制作する。線や十字、円や渦巻きなどのかたちを伴いながら現れる氏の作品は、シンプルであるゆえに様々な見方や体験を鑑賞者にもたらしてくれる。そうして「歩く」という人にとって根源的な行為が制作の原理となることで、作品はひそやかであると同時に力強く身体を世界に向けて無限にひらいていくための経験の器として機能する。

私が作りたかったのは形ではない。形よりも過程、見える物より見えない物、時間の運動の中にある境界線。イメージも概念も、たぶん私の投影にすぎない。それらはいつだって逃れ去ってゆく。作品を所有することはできない(*2)

上記は平田が1991年2月に秋田側から白神山入りし、雪の門をつくるフィールドワーク「開かない門」を行った際のコメントである。作品所有の不可能性は両者の作品に共通するが、ロングが自らの歩行をとおしてかたちやイメージにある種の強さ（どんなにひそやかに見えたとしても）を求める一方、平田はフィールドワークをとおしてイメージやかたちの弱さを積極的に見出し、絶えず自己を省みようとする点が興味深い。ここで人が世界に自らの場所を見出すうえでロングのように世界にひらかれ、平田のように自己に閉じられていくことは不可分な感覚であると想像してみよう。「わたし」がこの世界との「あいだ」でこれからの生を踏みしめるための第一歩となるかもしれない。

- * 1 世田谷美術館／京都国立近代美術館『リチャード・ロング 山行水行』（淡文社 /1996）p.15 から作家発言を引用。
- * 2 埼玉県立近代美術館『呼吸する風景 展覧会図録』（埼玉県立近代美術館 /1999）p.138-139

展示室E | [特別プログラム] みんなで楽しむ美術館一扉を開ける、光を入れる

世界規模で拡大する新型コロナウイルス感染予防のため、今年4月11日から5月21日にかけて休館していた青森県立美術館。再開館に伴い、今まで以上に全ての人が楽しみながら作品や美術館にふれることを目指した特別プログラム「みんなで楽しむ美術館」を展開した。テーマは「扉を開ける、光を入れる」。会場の随所に知識によらない鑑賞のヒントとなる言葉が展開されるとともに、本プログラムの冒頭ではオディロン・ルドンによる二つの作品を紹介。黒と色彩それぞれ異なる色と光への志向に感覚をひらいた後は、本展設営の様子を紹介する動画展示と、複数の光の組み合わせをもとに色の成り立ちを楽しみながら学ぶ体験展示が展開された。ここでは作品がもたらす光と色の体験を身体的な体験に連結させ、美術館での鑑賞体験をさらに拡張することが試みられている。

○関連企画

1. 上妻世海氏によるレクチャー「距離にまつわる制作論」

レクチャーを美術館 YouTube チャンネル上で公開

講師：上妻世海（文筆家／キュレーター）

【URL】 https://youtu.be/8_AjPp3LObs

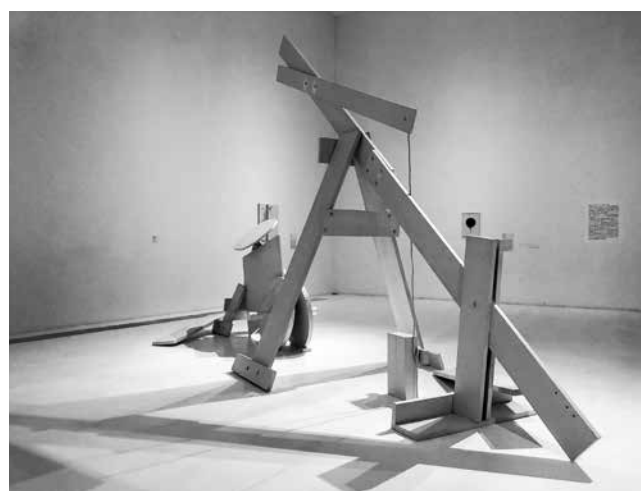


2. 担当学芸員によるギャラリートーク

展示解説を美術館 YouTube チャンネル上で公開

講師：奥脇嵩大（県立美術館学芸員）

【URL】 https://youtu.be/_6_9lL96XU8



「1. 精神と物質のあいだで：斎藤義重、高松次郎」展示風景

コレクション展 2020-3：ふるえる絵肌 2020年9月15日（火）－11月23日（月・祝）

「ふるえる絵肌」と題し、作品表面に現れる色や形といった質感－「絵肌（仏語：マチエール）」に着目してコレクション作品を紹介する展示。作品のマチエールを見つめることは芸術家の個性にふれること。写真や映像の発達にともないアイデアやコンセプトを重視する作品なども現れた今日、マチエールはバリエーション豊かに存在すると言える。また芸術以外の分野においてもマチエールを見つめることには多様な可能性がひそんでいる。例えば生態心理学者のJ.ギブソン（1904-79）は、環境を、生物の知覚行動を規定し・誘発させる関係性や質そのものであるとしたことで名高い「アフォーダンス」理論において、事物の表面（surface）とその上の肌理（texture）が知覚行動のカギであるとした。ならばこの現実世界に存在するマチエールの様々は、芸術世界の魅力を知ることのみに留まるものではなく、マチエールは入口として、私たちの周囲を取り巻く世界への新たな気づきをもたらす知覚の扉となるはずである。今回のコレクション展では様々なマチエールすなわち「ふるえる絵肌」を手がかりに、美術とともに太宰治の文学作品を取り上げ、芸術ジャンルを越境したところから作品という存在の魅力や奥深さを紹介した。総じて、世界について手ざわりで知る・考えることを目指して構成された展示である。

展示室 N | 今井俊満：絵肌を重ねて

今井俊満は、戦後日本の美術を語るうえで欠かすことのできない重要な画家である。今井が画家として活躍しはじめた50年代においては、フランスを中心としたヨーロッパで「アンフォルメル」と呼ばれる前衛美術運動が展開されていた。作品における身体の働きや絵具をはじめとする素材の物質性に着目し、「Signifiant de L'informel」すなわち「未定型の意味するもの」（M.タピエ）を追求したアンフォルメルは、アメリカにおいては抽象表現主義とも称され、日本においても当時の芸術家たちに強い影響を与えた。そんなアンフォルメルといち早く出会い、日本に紹介したのがフランスに留学していた若き日の今井である。今井による、厚く盛られた絵具層、激しくも繊細な筆さばきによる「熱い抽象」「厚重にして大胆な、新しい混沌」（小川正隆）ともいうべきマチエールを特徴とする絵画は、日本と世界のアンフォルメルを代表する作品と言える。

本章では収蔵する今井作品の中から、60年代における東洋志向のもと、厚く盛られた絵具の塊や飛び散る飛沫に自身が没入するようにして、新たな線や形、記号表現を生み出そうとしていたアンフォルメルの時代の作品を中心に紹介。次いで歴史的な事象に依拠しながら砂や写真といった物質素材を直接に作品表面に擦りつけ、独自のリアリズムを追求していた90年代の「ヒロシマ」を主題とする作品、最後に画家が最晩年に「現代の日本で唯一オリジナルな存在」として最大級の賛辞を残した少女たちの姿－当時の「コギャル」を描いた作品を紹介した。常にマチエールの表面効果にとどまることなく、東洋と西洋、記憶と記録、生のはざままで、様々な「異種交配による創造」を

試みてきた今井。およそ半世紀にわたって画家が展開してきたマチエールの多大な累積、多種多様さをとおして、この定かならぬ時代に、今井が自らを示しているところの「定かならぬ全体」の意味について感じていただくことを狙いとし、私たちが自らの生きるこの世界を血の通った形－手ざわりで理解する道をひらくきっかけとした。

棟方志功展示室 | 棟方志功：100パーセントの効果を生み出す

“棟方志功のマチエール”といえ、チューブから出してキャンバスにそのままのせたような絵具の盛り上がりが見られる油絵が印象的である。一方で本業の板画は板に墨を塗り紙をのせて摺るとい、特別なマチエールのない画－な摺りのように思える。しかし棟方作品の表面には多様な表現を見いだすことができる。

棟方は、「版という字は、出版とつかうように、複数的な商業用語のような感じを多くもつもので、芸術を根元として作り出される板画は、板という字が一番ぴったりくると思うのです。」と画－な印刷物とは異なるものとして板による画「板画（はんが）」と称する。版画には必ず入れられるエディション（限定部数）を入れず、注文を受けてから必要部数摺り、1枚しか摺られなかった作品もあれば、展覧会に出品するたび題名が変わったり作品の向きまで変わったり、板による画の“板画”だからこそその唯一無二の作品、また、同一作品でありながら複数性があることは棟方板画の特徴といえる。その特徴のひとつに“裏彩色”が挙げられる。色の数だけ版木が必要になる多色木版ではなく、棟方は摺った紙の裏から彩色を施した。「これは裏から絵具を着彩するのではなく、しみ込ませるというところにねらいがあります。」と話すとお、塗り絵や描写といった着彩とは違い、裏からしみ込ませることで境界も色の重なりもやわらかくなった彩色は、板木の範囲を超えて施されデザイン性の高いものである。一方で裏彩色に加え表にも彩色や金彩を施すことがあり、その直接的な着彩は肉筆画へと近づく。スケッチ、肉筆画、油絵、書、手紙、板画の板下など、筆を日常的に使っていた棟方だからこそ獲得したさまざまな筆遣い、また、拓摺りや板の性質を生かした板画など、多種多様な“棟方志功のマチエール”に注目した展示。（本章のみ構成：棟方志功記念館）

展示室 O | 太宰治、エイドリアン・パイパー：肉は心

日本文学史上に名を残す作家・太宰治とアメリカのコンセプチュアル・アートを代表する女性アーティストのエイドリアン・パイパー。本章では二人の作品を並置し、ジャンルを超えて機能する「マチエール」の魅力について紹介した。

太宰の『皮膚と心』（1939）の主人公は図案工の夫に新しく嫁いできた女性。二人は新婚にありがちな互いへの遠慮を滲ませつつも仲睦まじく暮らしていた。小説ではそんな女性の、吹き出物をきっかけに浮き沈み、夫への思慕を憎らしさに変える心の動きが、女性の一人称による独白形式を用いて表現されている。1930年代の文学においては心理学分野における「動的なイメージや観念が流れるように連なる」という意識の捉え方を

もとに、人物の主観的な思考や感覚を流れるように「意識の流れ」を記述する執筆法が盛んに試みられていた。『皮膚と心』もそうした作品と位置付けることができるが、ここで注目したいのが、作中「菊の花さえきらい」として、集合体恐怖症（トライポフォビア）的に皮膚病を語る部分です。意識の流れに挿さすようにして挿入されるこの肉々しい描写は、絵画におけるマチエールのように文学を味わい深くする働きを示し、そうした意味で本作から文学作品とともに絵画作品としての魅力を読み取ることが可能ではないでしょうか。今回は『皮膚と心』のマチエールの効果を確かめるべく、館壁面にテキスト全編を展開した。

一方パイパーの《Meat into Meat》(1968)は、彼女の周りの人、事物、環境に対する観察をもとにした記録を主題とする「Hypothesis (仮説)」シリーズの最初に位置づけられる作品。作家がハンバーグをつくり、それを当時のパートナーである男性が食す行為が9点組の写真に収められる。記録に徹することで、鑑賞者の多義的な解釈を容易に受け付けられない本作は、単純な行為と作品表面が作者の思考によって強固に結びついている部分でミニマルアートやコンセプチュアル・アートを代表する傑作のひとつと言えますが、「肉を肉へ」といったある種の生々しさを感じる作品タイトルを横目にすると、そうした作品表面の硬質さ・平滑さの間から、作者自身の時に湿り気を帯びた対象への視線をも感じることができるかのようだ。本章においては、マチエールとは作品表面から見て取ることができるばかりではなく、文字列の間や、思考と行為の襞の間からをも味わうことが可能なことが示唆されている。

展示室 M | 伊藤二子：かきむしる 一のちが形をあらわすとき
伊藤二子の作品に臨むにあたっては、伊藤が自らを「画家」でなく「造形家」としていたことに注意を向けることが大事なように思われる^{(*)1}。伊藤は自身の制作に特注のペインティングナイフを用います。「刃渡り」部分が20センチほどもある巨大な、ほとんど刀とも言えるような道具を用いて、絵具を一筋一筋、キャンバスの上に引いていく。そして「絵具はナイフとキャンバスの間で引き裂かれ、その臍をさらけ出しながら『いのちの形』へと昇華する」^{(*)2}。そこには目に見える形をキャンバスにうつすこと以上に、眼に見えない「いのちの形」をあらわす態度がある。この伊藤の「いのちの形」と対峙するため、次に個々の作品にタイトルを付さない展示や、一部を除いてほとんどの作品に用いられる40号という定型のキャンバスに目を向けてみよう。そこで作品は一個のモノとして捉えられる以上に、伊藤の分身とみなすことができるのではないかと。そこに繋ぎとめられた線や色は、定型の空間を基点に展開されることで、伊藤自身と作品との存在論的一致を促し、かえってマチエールのあらゆる部分に伊藤の「いのちの形」を宿らせることに成功しているように見える。

「黒をまず塗ります。あの辺にある白地のものもとにかく黒を塗るんです…(中略)…黒いものが見えているのでも、表面の黒の下には黒以外の何かが必ずあるんです」^{(*)3}

「これが私のいのちの形か」「昨日の己を越え得たか」。つねに自問し足掻いた軌跡としてのマチエール。その下の黒には死とともに黒土のイメージが含まれることを考え合わせるならば、伊藤の作品は人と世界の生死を通わず傷口として捉えることができるのではないかと。そうしてかきむしった後の皮膚からじくじくと血が滲むようにして作品表面に現れ続ける「いのちの形」。混迷の時代(いま)を生きる私たちは、一人の画家の「形」をもとに、自らの傷口をも直視すべき時が来ているのかもしれない。

- *1 伊藤は八戸で活躍した青森出身の書家・造形家である宇山博明の薫陶を受け、宇山の求めた不可視を形にすること―「非具象」を受け継ぎ、自身の制作においてもその展開を目指していた。
- *2 高橋しげみ「伊藤二子と八戸展(青森県立美術館だより)」『青森の暮らし グラフ青森』(2011 / グラフ青森) p.58-59
- *3 伊藤二子「アーティストトーク」(2011 / 「伊藤二子と八戸」展開連企画)

展示室 L | 馬場のぼる：線から立体へ

青森県三戸町出身の漫画家、馬場のぼるは、絵本『11びきのねこ』(こぐま社)シリーズの作者として広く知られる。一冊目の『11びきのねこ』は1967(昭和42)年に出版されましたが、50年以上を経た現在もなお、多くの子どもたちに愛され続けている。

絵本とは本来、文字をまだ読むことのできない子どもたちのために作られた作品だ。したがって絵本における「絵」とは、文字(言葉)で表現されたお話に添えられる補足的な存在などではなく、「絵」それ自体が作品世界へと子どもたちを誘い、お話を語っていく主体的な存在でなくてはならない。大人が子どもに絵本を読んであげた時、文字を読み終えた後も、子どもが飽きることなくそのページをじっと見続けているのは、まさに「絵を読んでいる」行為に他ならない。子どもたちは、そうやって身体全体で作品世界に入り込み、その中で自由に楽しむことができる。

絵本『11びきのねこ』シリーズは、そうした絵本の特徴が見事に発揮された作品だ。本作では、それぞれのねこに説明的な性格付けがなされているわけではない。しかし読者は文章によってストーリーを追いながら、絵の中に表現された“11びきのねこ”一匹一匹のリアリティ溢れる描写をとおして彼らの思惑や欲望、そして喜びや失望など、人間顔負けの豊かな感情を読み取り、自由にストーリーを膨らませていくことができる。そこに馬場作品の最大の魅力があるのではないかと。それは、対象の本質を瞬時に掴み取り、その核心を「絵」として表現することができた馬場のぼるの線の力に他ならない。

今回の展示では、作家のアトリエに残されていた立体作品などを中心に紹介した。「対象物を(またはそのイメージを)とらえる時の瞬間的な直観をそのまま画面にぶっつける時、線は立体感をもつ」と、自身のスケッチブックに記していた馬場のぼる。絵画表現と立体表現をあわせてご覧いただくことにより、馬場のぼるの「線」がもつ手ざわりと奥行きに触れる展示となった。

展示室 J | 橋本花：自分が花か、花が自分か

橋本花は、県の女性画家の先駆者として郷土の美術史にその名を連ねる一人である。安定した構図を重視し、的確な線を用いて構成された花をはじめとする静物画からは、画家の事物に対する親密な視線を感じることができる。1940年からの二年間、従軍画家としてインドネシアやフィリピン、中国を訪れ、1960年代のブラジルをはじめとする南米、ヨーロッパの歴訪などを経て、晩年浅虫にアトリエを構えた橋本は、当時のインタビューでこんな言葉を残している。

「キャンバスに向かっているときは、自分が花か、花が自分かわからなくなるときがあるの。ですからわたしと話し終わった花と別れるときはつらい。このごろ、ありがとうと口に出して言うことにしているの」^(※1)

ここには描くことを介して自己と描く対象との存在を完全に一致させる境地が示されていると言うことができ、作品を構成する線に対してもある種の凄みが感じられるかのようだ。本章ではそんな橋本の作品の中から、戦前の静物画、戦中戦後に訪れた諸外国で描かれた風景画、戦後に花や林檎を描いた作品などを紹介し、一人の画家の生涯におけるマチエールの変遷を展示した。

※1 「花のこころ描き続ける 橋本花さん」『あすなろ随想－わが道 わがこころ－』(1984／東奥日報社) p.28

展示室 K | 成田亨：「怪獣デザイン」と「彫刻」のはざまに

私は彫刻家ですから、形を基礎に怪獣を考えました。形の変形が私の怪獣といえます^(※1)

成田が手がけた怪獣デザインは劇中の物語に規定されない「物質の力の形象化」(安倍公房)と言える。例えば「バルタン星人」や「カネゴン」、「ケムール人」、「ガラモン」、「レッドキング」など思いつくままに成田がデザインした怪獣を挙げても、その形と物語の関連づけは困難だろう。神話やおとぎ話に登場する怪獣たちは物語(あるいは精神)の形象化と密接に結びついている。牛の角と虎の牙を持ち、虎模様の腰布を着けている鬼。水をたたえた皿を頭にのせ、甲羅を背負い、手足にみずかきを持っている河童など、個々の要素は必ず意味を有しており、その記号さえ備わっていればどんなイメージであっても鬼や河童を連想させてくれる。八岐大蛇の背が杉、檜、苔に覆われていることと、「ガラモン」が全身珊瑚状の突起物で覆われていることの意味の違いは明らかだ。成田怪獣は、モチーフとその意味内容を意図的にずらした「違和」を重視するシュルレアリスムの方法概念とは異なり、文脈の断ち切られた記号の組み合わせによって、意味なき新しい「表面」を作り出す営みと言えるのではないか。

例えば「ギャング」はトーテムポール、「チブル星人」は貝殻、「バルンガ」はファッション雑誌に掲載されたサイケ調の風船の束

から発想されたものだ。成田は、動植物や文化遺産、アートなど様々なモチーフを等価的に引用し、意外性のある変形を加えることで、誰も目にしたことのない新しい形を導きだしていった。彫刻家を志した学生時代に清水多嘉示へ師事し、ブルデルやジャコメッティ、マリノ・マリニーニ、ファッツィーニといった彫刻家の作品から大きな影響を受けた成田は、人体や生物をモチーフに「形としての翻訳」(成田)を加えた半抽象的な作品を多数制作しましたが、その手法は怪獣のデザインでも用いられているのだ。

とは言え、ひたすら材質感の表現に徹した怪獣デザインと、「絶望」や「苦悩」など自らの感情をモチーフの変形と表面の質感に託していった彫刻作品の間には印象として大きな隔りがある。怪獣デザインと彫刻という2つの表現形式によって成田はそれぞれ何を追及しようとしたのか。本展示は双方の「形」と「表面」を比較することで、その違いについて考えるものとなった。

※1 成田亨「怪獣はこうして考える」『怪獣の描き方教室』(ノーベル書房、1967年)

展示室 I,H | 佐野ぬい：青のエッセイ

「青」は幻想、静謐、そうしてヨーロッパでいうスカイブルー、青い空のさわやかさを表し、一方で、不安、哀愁、陰の雰囲気を持ち、人を奔放に魅了する不可思議な色だ。

佐野ぬいが「青」という色について記したエッセイの一節である。

その言葉通り、明るく澄んだ青から暗く沈んだ青まで、「青」はとても幅の広い色だ。日本にも水色、空色、藍、など多様な「青」があるが、西洋由来の絵具にもいくつもの青色があります。セルリアンブルー、インディゴブルー、ウルトラマリンブルー等々。佐野はこれらのさまざまな「青」で、あるときは大胆に、またあるときは繊細に、キャンバスに形や線を描いていく。そこに赤、白、黄、黒、などの色も加わると、色と形と線が隣り合い、重なり合いながらリズムを刻み、ハーモニーを奏ではじめる。

リズムとハーモニーに導かれて画面をみていると、形や線の多くが一つの色で均一に塗られているのではないことに気付くだろう。絵具が盛り上げるように厚く塗られ、あるいは重ねた色が透けるように薄く塗られ、線は細く軽妙なタッチで描かれ、あるいは太く重々しく引かれている。なめらかでつややかに仕上げられた表面があるかと思えば、筆跡の凹凸を荒々しく残すところもある。

このような画面の質感、マチエールは、描かれている色や形と相まって、私たちが作品から受け取る印象に大きな影響を与えている。画家は創作において、画面の構成や色遣いととも、どのようなマチエールを創り上げるかをとても大切にしている。色と形と線、そしてマチエールの織りなすセッションが、画面に響き渡る。

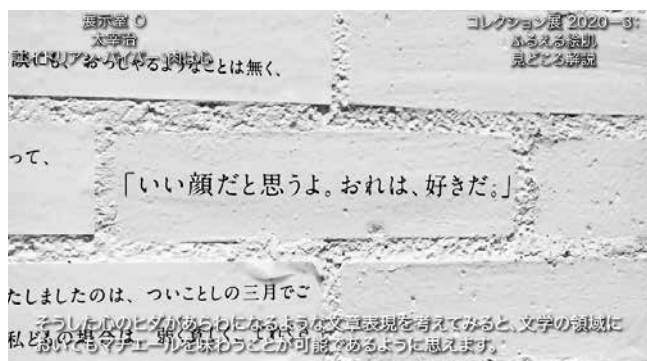
○関連企画

担当学芸員によるギャラリートーク

展示解説を美術館 YouTube チャンネル上で公開

講師：奥脇高夫（県立美術館学芸員）

【URL】 <https://youtu.be/nNU5hoYRKQ0>



「佐野ぬい：青のエッセイ」展示風景

コレクション展 2020-4：危機の中の芸術家たち 2020年11月28日（土）－2021年2月23日（火・祝）

地球規模での気候変動や新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大、Black Lives Matter 運動。2020年は人の生存や社会における自由の危機について様々に考えさせられた年であった。そんな今年最後のコレクション展として今回は工藤哲巳（*2020年で没後30年）の「社会評論の模型」作品群を中心とし、澤田教一（*2020年で没後50年）によるベトナム戦争下で撮影された写真、今和次郎・純三兄弟による関東大震災前後の公共建築や劇場に取材した仕事、同時期開催の企画展「阿部合成展」関連として弟子にあたる小坂圭二や成田亨らの作品を紹介。全体をとおして、芸術家たちの想像力や批判精神を手がかりに、私たちが「危機」を基点に、これからの世界を生き延び・つくりなおすための感性を養う展覧会として開催した。

展示室 N | 今和次郎、純三：フィールドワークの小徑

本展は弘前出身の今和次郎と今純三による関東大震災とその後の公共建築や劇場をめぐる仕事ではじまる。生活を独自のまなざしで切りとり、採集・分析する「考現学」の創始者であり、建築家やデザイナーとしても知られる兄・和次郎と、関東大震災を機に帰郷し、青森の初期版画文化の立役者として知られる画家／版画家の弟・純三。震災以降の和次郎の、東北地方の飢饉に備えた貯穀倉庫「郷倉」の調査設計、被災者や生活弱者の生活支援活動「セツルメント」への関わりと、同時期の純三による、かつて黒石市に存在した「黒石劇場」舞台背景画制作をはじめとする劇場の仕事は、相互に呼応する部分があるように見える。ここでは参考軸として、震災後の東京で展開されたバラック装飾社の仕事を紹介する。和次郎は仲間とともに「震災バラックの調査を行い人々の巧まざる創意に注目するとともに、バラック装飾社を創設して被災都市の風景が人々に与える心理効果を考慮したアバンギャルドなデザイン」^(*)を施した。そんな活動が「建築の醇境を知らずして、狂乱と放恣とを跋扈せしむる」（滝沢真弓）という言葉で批判された際、和次郎はこんな言葉を残している。

‘裝飾とは…（中略）…人生や世相などを含んだ複雑なるものの…（中略）…感情飛躍の亢奮からの偶然の結果が空間に後付けられることによって生ずる’

ここには「生きることの複雑さ＝裝飾」という和次郎独自の芸術観の発露がみられ、後にこの裝飾に対する考え方が郷倉やセツルメントに仮託され設計仕事として内面化された、という見方が可能なように思える。そんな個と社会をつなぐ建築空間へのまなざしが純三においても相通じており、純三の場合は青森の街の人々の暮らしに取材した版画や黒石劇場の仕事の中で内面化されている、と言えるのではないか。今回の展示では上記に関連する作品や記録写真を紹介し、二人の東京～東北・青森における「フィールドワーク（野外調査）」をとおして、当時震災という危機に発する生活と美術の連帯を手がかりに、今日

の公共性と芸術の関係について考える展示となった。

‘雪国の春ぐらい楽しいものはない…（中略）…吹く風も色調も、回り舞台かのように変わってしまう’^(*)

*1 今和次郎『今和次郎 採集講義』（2011・青幻社、東京）106頁

*2 今和次郎『津軽に残る豪農の家』『民家採集 今和次郎全集（3）』（1971/ドメス出版）

棟方志功展示室 | 棟方志功：信念の裸婦

明治初期、版画は浮世絵の流れからくる職人的な分業制や量産性から工芸や印刷物の扱いであり、明治末期～昭和初期にかけて「自画・自刻・自摺」を掲げた創作版画運動が最盛期を迎えることで、1927（昭和2）年、帝展第2部西洋画に出品が認められたばかりだった。美術の分野として認められ始めた版画で生計を立てるのは苦しい時代に、油絵画家をめざして上京した棟方は、版画の道へと進む決意を固めていた。その日食べるものがない苦しい暮らしであったが、チャ夫人は画業にプラスとなる仕事以外しないでほしいと頼んだという。必死になった棟方は歌舞伎座や帝国劇場の売店で版画を売る契約をとったり、文人との交流から雑誌や書籍の挿絵や装幀を手掛けたりしてゆく。その間も版画制作に励んだ棟方は独自の表現を展開させるに至り、注目する人も出始めた。そして1936（昭和11）年、国画会展に出品した全長約7mという常識破りの版画絵巻《大和し美し》が転機となり作品が売れ出し、版画家としての生活に光明が差し込む。常識を打ち破ったのは作品の大きさだけではなかった。1934（昭和9）年制作の版画《ヴェニウス生誕》から裸婦像の表現方法を模索し始めた棟方は、幾つかの作品で裸婦像に近づく姿を彫った後、後年《般若心経版画冊》としてまとめられる作品を戦時体制下の1941（昭和16）年から数冊ずつ発表する。そして戦況厳しい1944（昭和19）年に《乾坤頌・灼飛神炎「心経」版画鏡》と題して発表した。戦意昂揚に資する課題に限られた国主催“戦時特別展”への裸婦像は反逆と捉えかねないがこの作品にお答めはなく、戦時体制下に決死の覚悟で生み出した裸婦像は、以後芸業の中心に据えることとなる。苦しい道程と知りながらも版画家になる決意をし、実直に版画と向き合い歩み始めた棟方が、戦時体制下においても表現の模索を止めなかった信念の版画を紹介する展示となった。（本章のみ構成・執筆：棟方志功記念館）

展示室 O | 重力／傷／恩寵

‘真空を求めてはならない。なぜなら、真空を充たすために超自然的なパンを当てにするのは神をこころみることになるだろうから’^(*)

野辺地に生まれた彫刻家・小坂圭二の作品を紹介する。自身の戦争体験をもとにキリスト教に惹かれた小坂は38歳で洗礼を受けており、立像や肖像彫刻とともにキリスト教的な主題の作品を多く制作している。その彫刻は大胆な線と面による幾何

学的な構成に具象的な要素が交わることで、独自の真空状態とも言うべき空間の生成が促されているように見える。しかし小坂の彫刻において注目すべきはそうした真空状態の生成以上に、その彫刻がこの現実においてどのような形を伴い現れるのか、ということだ。カギとして見るべきは「重さ」。洗礼後のフランス留学の際に教会で見た十字架の重さに感激し、そのような制作を自身に課したという小坂。彼は自身が夢見た神と人が共にある天上世界を、そのブロンズ彫刻が孕む「重力」という下降の力を媒介に現実化させることを目指した、と言える。一方彫刻表面に現れる激しい線。そこには作家自身の中国やラバウルでの戦争体験の影を見ることが出来る。例えば《世界の破れを担うキリスト》(1970)には、大きく裂けたザクロに、キリストの肋骨の痛み、傷口の痛々しさを感じて衝撃をうけた経験を造形化されており、ザクロの実(肉体)と地球(世界)とを傷がたぎ、個と世界を同時に引き受ける存在としてのキリストが表現される。

‘魂の自然な動きはすべて、物質における重力の法則と類似の法則に支配されている。恩寵だけが、そこから除外される’(*2)

調和と混沌が併存する小坂の作品には彫刻の問題として己と世界の「傷」を引き受け他者にひらくこと、そしてその先に神と人が調和する恩寵空間が目指されていると言えよう。こうした小坂の制作には、小坂とほぼ時代を同じくしたフランスの哲学者であるシモーヌ・ヴェイユ(1909-43)の、キリスト教神学の思想に裏打ちされた思想における世界への愛と通じるものがある。

* 1,2 シモーヌ・ヴェイユ『重力と恩寵』(1947)

展示室J | 澤田教一：空想のゲリラ

ベトナム戦争の戦火を逃れて川を渡る一家をうつした写真《安全への逃避》(1965)で知られる青森市出身のカメラマン・澤田教一を紹介した。ベトナムでの澤田の写真は戦争終局に向けて大きく世論を動かし、自身もピューリッツァー賞はじめ数々の賞を受賞している。そんな写真を前に含むべきは澤田の、故郷を奪う／奪われる側どちらにも共感できてしまう複雑な立ち位置である。青森における三沢基地という日本の中のアメリカを横目に、UPI通信社(アメリカ資本)の派遣でベトナムに赴く澤田。彼が戦場で目の当たりにしたのは命と故郷を奪い／奪われる人々の姿であった。澤田がそんな現地の状況を故郷と地続きに感じたであろうことは想像に難くない。そうして今ここにある写真は、アメリカとベトナムに愛憎半ばするような、複雑な感情を滲ませた澤田が辛うじて現像し得たものと想像してみたい。どうやら澤田自身もまた、故郷と世界の危機をさまよう一人のゲリラ兵だったということができそうである。無論危機は澤田個人に留まらない。例えば現在の日本においても「帰還困難区域」が内在することを考え合わせる時、写真にうつる人々は反転し、私たちの姿として再浮上する。澤田の写真は現代の故郷喪失者の姿をうつす鏡となり得る。そうした写

真＝場所を基点に、私たちは自身が拠って立つ複雑な存在構造を自覚し、厳しく問う姿勢をもたなければならないはずだ。

‘ここは何処でこの道は何処へ行くのだ

教えてくれ 応えろ

背中の銃をおろし無音の群落につめよると だが武器は軽く

お間違いだ おれは手に三尺ばかりの棒片を握んでいるにすぎぬ?’

—黒田喜夫『空想のゲリラ』(1955)より

そうしたことの一助として、澤田の写真に山形県寒河江に生まれた「飢餓の詩人」黒田喜夫(1926-84)の詩「空想のゲリラ」の世界を幻視したい。登場するのは前線からの帰還兵。その父祖は土地をもたない(おそらく小作農的な)人々。兵士は故郷の村へ帰ろうとしますが、村は彼の存在を拒絶し、村に続く道は兵士の眼前から消えていきます。非在の村落共同体。ベトナム戦争。帰還困難区域。そこでは絶えず何かが結ばれながら断ち切れ、その不断の運動に拮抗し得る想像力の訪れが待たれているように思える。そこで携えるべき獲物は銃でもカメラでも、たとえ棒片だったとしても問題ではない。問題は私たちがそこに何を込めるかだ。

展示室K | 成田亨：彫刻と怪獣の間で

‘真の芸術って何だろう?おそらく無償の行為だろう?私は、そう思っています。映画をつくったり、デザイナーと云われる人種は、芸術家ではなくなりそうです。世の中の変化と要求に、作家の方がピントを合わせて、努力は、自己探求ではなく、環境の変化への目移りだ、と云う事になりそうです。パイオニヤは薄幸の中にこの世を去り、そのパイオニヤの開いた道を、手際よく頂いて、我が世の春を謳うのがデザイナーと云う人種かも知れません。(中略)私はデザイナーです。これは彫刻家のアルバイトと、割り切れるものでもありません。新しい形を創ろうとしている自分は何だろう?(中略)私は彫刻家なのだろうか?或いはデザイナーなのだろうか?その両方だろうか?そのどちらでもないのだろうか?’(*1)

青森高校在学中、阿部合成に学び、詩人山岸外史から薫陶を受けた成田亨。合成に「君は抒情詩人だ。浪漫派だ。」と賞され、「作為に満ちたエモーションのない絵は一喝された。」という成田は、晩年まで「初発的感情」という創作動機的重要性を繰り返し述べた。少年期に戦争記録画を見て衝撃を受け、戦後の混乱期に多感な青年期を過ごし、高度成長期に入ると同時に映画、そしてテレビの仕事を手がけ、バブル期に自身の彫刻の集大成とも言える《鬼のモニュメント》(1991)を京都府大江町に完成させた成田は、ある意味で戦後社会の動向に沿いつつ創作活動を続けた作家と言ってよい。今回展示している《翼を持った人類の化石》(1971)は科学技術の発展や経済至上主義によって人間性が喪失していくことへの危機意識が表現された作品である。さらに、自らがデザインしたウルトラマンや怪獣が消費の対象という「商品」になってしまったことで精神的に疲弊し

た成田は「悲劇的なもの」へと傾倒し、晩年には「僕の描きたい絵のテーマは〈絶望〉です」(*2)と述べるようになっていった。怪獣デザインについても成田は、「怪獣が芸術ではないというのは、内容的に芸術的であるかないかという問題じゃなくて、やっぱり芸術の分類の形式から、そうになっているんじゃないですか。」(*3)と述べているが、それはサブカルチャーが「傍流」であるという集合的無意識を反映したものと言えるのではない。そうした一般的な価値観と、自身の表現との間で終生苦悩したのが成田亨という芸術家である。それを成田個人の問題と捉えるのではなく、広く戦後日本の文化史／社会史の中に位置づけ、考えてみる。社会の閉塞感が再び強まりをみせる今、成田亨の歩んだ人生と残された作品から考えるべき点は多い。

- * 1 成田亨「彫刻と怪獣との間」『成田亨 彫刻・映画美術個展』リーフレット、1968年
- * 2 成田亨『特撮と怪獣』フィルムアート社、1995年、p.256
- * 3 前掲書『特撮と怪獣』 p.251

展示室 I, H | 工藤哲巳：私たちの肖像

「危機の中の芸術家たち」の最後は、今年没後30年となる五所川原や弘前ゆかりの芸術家・工藤哲巳について、初期から渡仏後のヨーロッパの人間中心主義を批判する「あなたの肖像」や環境汚染、エコロジーを主題とした作品群、晩年の郷土に根ざした作品までを5つのパートに分け、2つの展示室を用いて紹介した。フランスの美術評論家でアンフォルメル運動の推進者であったM. タピエに激賞され、1950～60年代初頭における日常や社会全体の中で芸術を捉えなおす動向の中でも一際急進的な存在だった工藤は「反芸術」(by 東野芳明)の旗手として、その名を知られるようになる。芸術の占める領域を原子物理学や集合論を手がかりに拡張することから始まった彼の仕事は、その初期から、従来の芸術を離れて人間存在や文明観を省みるような余地を孕んでいた。そうして展開された人間と自然、電子回路や放射能をも含めた技術との共生関係をどこまでも現実根ざした形で主張する作品は、ウイルス等をも含めた「人間ならざるもの(ノンヒューマン)」との共存を主題とするエコロジー論の潮流の下、「人新世」(*1)の時代とも言われる今日において、その意義をいよいよ強めている。工藤の作品における菌類状にドロドロと溶けあう身体と電子回路と自然。この現実において酸性物質その他を含む雨を待ち、ウイルスにまみれた空気を吸い、マイクロプラスチックを取り込み生きる私たち。工藤の作品世界は、今年その位相を完全に反転させ、現実そのものとなった。ならば私たちに課せられた課題は、工藤の作品を軸にこの現実を再反転させ、いかなる未来を拓けるかを検討することだと言える(*2)。その意味で工藤の作品は、私たちが技術と自然のもつれた環の中から、他者と共にこの世界を生き延びるためのエコロジカルな倫理と形式、すなわち「あなた」に留まらない、この世界に生きる全てのものを包摂した「わたしたち」の肖像を示してくれているかのようだ。嗚呼、貧しくも荘厳なれ、私たちの灯台よ！

- * 1 人間活動が地球規模での環境変動に影響を与える地質年代を示す語。オゾン層破壊の研究者として1995年にノーベル化学賞を受賞したパウ・クルツェンにより初めて名づけられ、今日のエコロジー論の主要な基点の一つとなる。なお「人新世」の始まりは1950年代と考えられているところに工藤哲巳の制作と軌を一にする部分を見出すことができそうな点が興味深い。
- * 2 本展が工藤哲巳の命日の月である11月に始まり、誕生日である2月23日に会期終了することは偶然ではないかもしれない。

○関連企画

担当学芸員によるギャラリートーク

展示解説を美術館 YouTube チャンネル上で公開

講師：奥脇嵩大(県立美術館学芸員)

【URL】<https://youtu.be/Je12R2ASjBQ>



今和次郎(写真：バラック装飾社の作業場看板)(1923)

〈特別展示〉

展示室 M | 竹浪比呂夫：鍾馗百図

コロナ禍で戦後初めて中止となった2020年の青森ねぶた祭。大型ねぶたが制作できなくなったねぶた師の危機に対し竹浪は、創造のエネルギーを、古来より魔除け、疫病除けの効験があるとされ、ねぶたのモチーフとしても馴染み深い「鍾馗」の表現に転化させる。疫病退散を祈るかのよう5月下旬より9月初旬にかけて1日1作がインスタグラムで発表され、最終的に100枚の多様な鍾馗像が生み出された。いずれも葛飾北斎や河鍋暁斎、月岡芳年など古典の「本歌取」で作画された鍾馗像であり、伝統性や伝承性を強く内包した現代の表現となっている。六曲一双の貼交屏風として完成した本作を、感染症の危機を乗り越え、その終息を願うため、特別公開した。

〈青森県立美術館サポートシップ倶楽部共催展覧会〉

展示室 P, Q | 多田友充：AMF（集团的悪についての省察 → I² USK 犯罪 SD 烏骨鶏 Z、OUT of 眼中）

「青森県立美術館サポートシップ倶楽部」との共催により、画家・多田智充の個展を開催した。多田友充は、絵具・スプレー・墨といった多様な素材に反応する身体感覚や「集团的悪」に抗する自由な精神の探求に導かれて、人間の内奥に広がる豊かで透明な時空を、洗練された色彩とエネルギーに満ちた線描によって表現してきたアーティストである。今回の展示では多田が青森・弘前に滞在していた約8年の歳月の中で生み出された絵画や新作のドローイング等を紹介した。

学芸

美術資料収集

美術資料貸出状況

作品保存修復

凡例

- 1 「美術資料収集」における作品データは、作家名、作品名、制作年、寸法（高さ×縦×横、cm）、技法、収集区分の順に記した。
- 2 「美術資料貸出状況」における作品データは、作家名、作品の順に記した。

美術資料収集

令和2年度収集美術資料

| | | | |
|--|--|--|---|
| 高木 志朗 とんぼと蝶 1966 紙・多色木版 52.7 × 36.2 まくり | 高木 志朗 冬の津軽路 1977 紙・多色木版 36.0 × 53.0 まくり | 原田 メイゴ 脇野沢村長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） | 原田 メイゴ 三沢市（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） |
| 高木 志朗 鐘のある家 1967 紙・多色木版 53.7 × 38.1 まくり | 高木 志朗 大雁塔 1983 紙・多色木版 53.0 × 36.1 まくり | 原田 メイゴ むつ市（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） | 原田 メイゴ 下田町長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） |
| 高木 志朗 卓上の花 1971 紙・多色木版 36.0 × 52.8 まくり | 原田 メイゴ 大畑町長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） | 原田 メイゴ 東通村長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） | 原田 メイゴ 六戸町長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） |
| 高木 志朗 北国の樹ー9 1971 紙・多色木版 65.2 × 43.0 まくり | 原田 メイゴ 風間浦村長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） | 原田 メイゴ 横浜町長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） | 原田 メイゴ 十和田市（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） |
| 高木 志朗 飛翔ーB 1975 紙・多色木版 36.5 × 52.8 まくり | 原田 メイゴ 大間町長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） | 原田 メイゴ 六ヶ所村長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） | 原田 メイゴ 十和田湖町長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） |
| 高木 志朗 遊魚ーB 1975 紙・多色木版 36.4 × 52.7 まくり | 原田 メイゴ 佐井村長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） | 原田 メイゴ 野辺地町長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） | 原田 メイゴ 岩木町長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） |
| 高木 志朗 白鷺のささやき 1976 紙・多色木版 48.1 × 38.2 まくり | 原田 メイゴ 川内町長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） | 原田 メイゴ 東北町長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） | 原田 メイゴ 相馬村長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） |
| 高木 志朗 白鷺の詩 1976 紙・多色木版 48.0 × 38.2 まくり | 原田 メイゴ 川内町長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） | 原田 メイゴ 東北町長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） | 原田 メイゴ 相馬村長（「首長のオフィス」シリーズ） 撮影年：2000 プリント制作年：2001 ゼラチン・シルバー・プリント 14.9 × 22.6（イメージ） 20.3 × 25.4（ペーパー） |

| | |
|---|--|
| 伊藤 俊幸 「岩木おろし」シリーズ 撮影年：1983-86 (ニュープリント 2019) インクジェット・プリント 33.0 × 41.3 (イメージ) | 伊藤 俊幸 「岩木おろし」シリーズ 撮影年：1983-86 (ニュープリント 2019) インクジェット・プリント 33.0 × 41.3 (イメージ) |
| 伊藤 俊幸 「岩木おろし」シリーズ 撮影年：1983-86 (ニュープリント 2019) インクジェット・プリント 33.0 × 41.3 (イメージ) | 伊藤 俊幸 「岩木おろし」シリーズ 撮影年：1983-86 (ニュープリント 2019) インクジェット・プリント 33.0 × 41.3 (イメージ) |
| 伊藤 俊幸 「岩木おろし」シリーズ 撮影年：1983-86 (ニュープリント 2019) インクジェット・プリント 33.0 × 41.3 (イメージ) | 伊藤 俊幸 「岩木おろし」シリーズ 撮影年：1983-86 (ニュープリント 2019) インクジェット・プリント 33.0 × 41.3 (イメージ) |
| 伊藤 俊幸 「岩木おろし」シリーズ 撮影年：1983-86 (ニュープリント 2019) インクジェット・プリント 33.0 × 41.3 (イメージ) | 多田 友充 ぜんりょうなるものはそうぞうしない 2014 パネル・油彩、顔料、アクリル 200.0 × 360.0 3点のパネルを連結 青森県立美術館サポートショップ倶楽部より寄贈 |
| 伊藤 俊幸 「岩木おろし」シリーズ 撮影年：1983-86 (ニュープリント 2019) インクジェット・プリント 33.0 × 41.3 (イメージ) | 多田 友充 あかねぞら 2012 パネル・アクリル、顔料 182.0 × 276.0 3点のパネルを連結 |
| 伊藤 俊幸 「岩木おろし」シリーズ 撮影年：1983-86 (ニュープリント 2019) インクジェット・プリント 33.0 × 41.3 (イメージ) | 多田 友充 手を挙げる人 2012 パネル・アクリル 122.0 × 243.0 |
| 伊藤 俊幸 「岩木おろし」シリーズ 撮影年：1983-86 (ニュープリント 2019) インクジェット・プリント 33.0 × 41.3 (イメージ) | 多田 友充 青森 2011-2019 2020 (撮影年：2011-2019) 写真 (112点) によるインスタレーション 可変 デジタルデータ |
| 伊藤 俊幸 「岩木おろし」シリーズ 撮影年：1983-86 (ニュープリント 2019) インクジェット・プリント 33.0 × 41.3 (イメージ) | 竹浪 比呂央 鍾馗百回 2020 紙本着色 各 180.0 × 360.0 六曲一双屏風 |
| 伊藤 俊幸 「岩木おろし」シリーズ 撮影年：1983-86 (ニュープリント 2019) インクジェット・プリント 33.0 × 41.3 (イメージ) | |

美術資料貸出状況

Yoshitomo Nara

貸出先

- ・LACMA (Los Angeles County Museum of Art)

展示施設 (会期)

- ・LACMA (Los Angeles County Museum of Art)
(2020/4/5 -)
*新型コロナウイルスの影響により展示中止を継続

貸出点数: 18

作品名

- ・奈良美智「港のあの娘」
- ・奈良美智「Sleepless Night、先生の夢」
- ・奈良美智「アラビアの船」
- ・奈良美智「ゼロ戦、空中戦」
- ・奈良美智「ゼロ戦のゆめ」
- ・奈良美智「自分がかめないよ」
- ・奈良美智「西と東、2つの兎」
- ・奈良美智「Somewhere in the Sleepless Night」
- ・奈良美智「Untitled」
- ・奈良美智「Diver dog」
- ・奈良美智「インド人もびっくりだよん」
- ・奈良美智「All Right!」
- ・奈良美智「C'mon! C'mon!」
- ・奈良美智「O.T (チェックケース)」
- ・奈良美智「続いてゆく道に」
- ・奈良美智「The Last Match」
- ・奈良美智「Mumps」
- ・奈良美智「Heads」

もうひとつの日本美術史 近現代版画の名作 2020

貸出先

- ・福島県立美術館、和歌山県立近代美術館

展示施設 (会期)

- ・福島県立美術館、和歌山県立近代美術館
【福島】2020/7/11 - 8/30
【和歌山】2020/9/19 - 11/23

貸出点数: 5

作品名

- ・関野準一郎「ニコライ堂 (聖堂)」
- ・関野準一郎「郊外の景」
- ・関野準一郎「銅版画頒布会第一回作品・聖堂・解説」
- ・関野準一郎「銅版画頒布会第二回作品・郊外の景・解説」
- ・関野準一郎「エッチング頒布会十二回完了のお願い」

生誕 100 年 | ロボットと芸術 ～越境するヒューマノイド

貸出先

- ・苫小牧市美術博物館

展示施設 (会期)

- ・苫小牧市美術博物館
(2020/7/18 - 9/13)

貸出点数: 10

作品名

- ・工藤哲巳「さいころの中の自己充足」
- ・工藤哲巳「モルモットの関係」
- ・工藤哲巳「あなたは変態しつづつある-D」
- ・中村宏「観光独裁」
- ・成田亨「ガラモン初稿」
- ・成田亨「キングジョー初稿」
- ・成田亨「セミ人間」
- ・成田亨「バルタン星人初稿」
- ・立石紘一「共同社会」
- ・ヴァンリー・カンディンスキー「オレンジ」

特別展「あるがままのアート」

貸出先

- ・東京藝術大学大学美術館、NHK 視聴者総局事業センター

展示施設 (会期)

- ・東京藝術大学大学美術館
(2020/7/23 - 9/6)

貸出点数: 6

作品名

- ・林田嶺一「とある玩具店のショーウインドウケース(兵器工場「キャラクター」)」
- ・林田嶺一「土壁に影坊主」
- ・林田嶺一「北四路アイシスシアター前の広告板」
- ・林田嶺一「上海郊外スコットロード街の、とある喫茶店の窓から見た櫻村兵曹長の片翼で帰還する陸軍機の機影と店内風景」
- ・林田嶺一「被爆地広島」
- ・林田嶺一「津軽海峡」

冬の展示「胸肩妃」

貸出先

- ・棟方志功記念館

展示施設 (会期)

- ・棟方志功記念館
(2020/12/6 - 2021/ 3/15)

貸出点数: 1

作品名

- ・棟方志功「御吉祥大辨財天御妃尊像図」

春の展示「AOMORI NO KO」

貸出先

- ・棟方志功記念館

展示施設 (会期)

- ・棟方志功記念館
(2021/3/16 - 6/13)

貸出点数: 1

作品名

- ・棟方志功「陶器「青森の子」紋」

大・タイガー立石展

貸出先

- ・千葉市美術館、高松市美術館、埼玉県立近代美術館、うらわ美術館

展示施設 (会期)

- ・千葉市美術館、高松市美術館、埼玉県立近代美術館、うらわ美術館
【千葉】2021/4/10 - 7/4
【高松】9/18 - 11/3
【埼玉、うらわ】11/16 - 2022/1/16
※貸出開始が2020年3月23日のため本年度貸出作品として記載している。

貸出点数: 4

作品名

- ・林田嶺一「とある玩具店のショーウインドウケース(兵器工場「キャラクター」)」
- ・林田嶺一「土壁に影坊主」
- ・林田嶺一「北四路アイシスシアター前の広告板」
- ・林田嶺一「上海郊外スコットロード街の、とある喫茶店の窓から見た櫻村兵曹長の片翼で帰還する陸軍機の機影と店内風景」

作品保存修復

保存管理

展示・保管している美術資料の公開と保存を両立させるため、温湿度等の空調や照度の調整、粉塵・有害ガス・虫菌害等の定期的な環境調査の実施などにより展示・収蔵環境を管理している。また、日常的な点検に基づき、必要に応じて収蔵作品等のマット装や表装・額装の改善、保存箱の作成、専門家による調査・保存処置等を行った。さらに、基本データの整理、写真撮影による画像データの記録をおこなった。

教育普及

普及プログラム

スクールプログラム

サポートスタッフ

普及プログラム

1 こどもアトリエ

小学生以下を対象にワークショップの部屋を開放し、画材、粘土などを使い、画材での汚れ等を気にせずに自由に創作できることを特徴に掲げて実施した。また、自由制作が難しいこどもも想定し、当館の収蔵作家（青森県にゆかりのある作家）についての知識の普及も兼ねて、当館の収蔵作家にちなんだテーマも用意した。

なお、令和2年度は年4回の開催を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大により、1回のみの実施となった。

日時：9月5日（土）10:00 - 15:00

場所：青森県立美術館 ワークショップA、ワークショップB

テーマ：「11 びきのねこ」スタンプを使った作品づくり、オリジナルスタンプづくり

参加者数：143人



9月5日 こどもアトリエ

2 鑑賞ワークショップ「じぶん鑑賞のすすめ2020」

じぶんの感じ方や考え方、経験などをもとにアート鑑賞を楽しむ「じぶん鑑賞」を、常設展示室（コレクション展2020-Ⅲ）の作品に関する問いを解きながら体験するワークショップを行った。

開始前に、参加者へ冊子（問いや展示室マップ、作品リストを記載したもの）、鑑賞手帳、鉛筆を配布し、やり方を説明。その後、展示室へ移動し、各自4つの問いを解くという内容で実施した。

日時：10月31日（土）【第1回】11:00 - 12:00

【第2回】14:00 - 15:00

場所：青森県立美術館 常設展示室

（コレクション展2020-Ⅲ）

参加者数：20人（第1回9人、第2回11人）



WS「じぶん鑑賞のすすめ2020」チラシ、参加者に配布した鑑賞手帳と冊子

スクールプログラム

概要

未来の青森県を担う感性豊かな人材を育成するためには、多くの子どもたちに対して、優れた美術作品に出会い本物が持つ素晴らしさを体験し、ふるさと青森の芸術文化や先人を学ぶ機会を提供することで、郷土に対する誇りが持てる鑑賞指導を行うことが極めて重要である。

このため、子どもたちが居住地や家庭環境の違いの影響を受けずに、級友と語り合いながら発達段階に応じた深さで等しく学ぶ機会を提供する学校教育の場を活用して、児童・生徒、教育関係者を対象に、鑑賞指導、研修会等の多様な事業を行うスクールプログラムを実施した。

学校団体の来館受入れ

多くの子どもたちが優れた美術作品に接し、豊かな感性や能力を伸ばす機会として、学校団体の来館を積極的に受け入れている。特に、作品を見て子どもたちが感じたことや考えたことを大切にしている。

メニュー：

鑑賞プログラム（自由鑑賞）、オリジナルプログラム（創作体験、他）

※本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、対話型鑑賞プログラムを休止とした。



創作体験「怪獣デザインをしてみよう！」

| 月 | 学校団体 | | 団体数 | | | | | 計 |
|-----|-------------|-------------|-----|----|----|---|----|---|
| | 展覧会毎 | | 小 | 中 | 高 | 特 | | |
| | 常設展 (人数) | 企画展 (人数) | | | | | | |
| 4月 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 5月 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 6月 | 20 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | |
| 7月 | 45 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 2 | |
| 8月 | 34 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 2 | |
| 9月 | 1040 | 0 | 4 | 8 | 2 | 3 | 17 | |
| 10月 | 1517 | 0 | 18 | 9 | 0 | 2 | 29 | |
| 11月 | 484 | 0 | 5 | 2 | 4 | 3 | 14 | |
| 12月 | 583 | 50 | 7 | 0 | 1 | 0 | 8 | |
| 1月 | 56 | 56 | 0 | 2 | 0 | 0 | 2 | |
| 2月 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 3月 | 60 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 2 | |
| 合計 | 3,839 | 106 | 37 | 22 | 10 | 8 | 77 | |

出前講座

学校の要望等に応じ、学校での出前形式による講座（創作体験や職業講話等）を実施することがある。

実績：0校

職場体験

美術館の教育普及活動、学校連携、キャリア教育推進等の観点から、各学校の要望を踏まえながら、中学校・高等学校等からの職場体験、見学等を受け入れ、美術館の公共施設・観光施設としての役割や仕事の体験を通じて学ぶ機会を提供した。

受入実績：1校 延べ6人

アートカード

図工・美術の授業及びクラブ活動などの学校教育活動で気軽に使用できる鑑賞教材として、棟方志功、奈良美智、鷹山宇一、豊島弘尚等、本県ゆかりの作家の作品や三内丸山遺跡出土遺物などを50点にまとめた「アートカード」を制作し、平成19年度から県内9施設において学校への貸出しを行っている。

貸出実績：4件

貸出施設一覧

| |
|-----------------------------------|
| 施設・機関名 |
| 青森県立美術館 |
| 青森県総合学校教育センター |
| 青森市教育研修センター |
| つがる市生涯学習交流センター「松の館」(つがる市教育委員会指導課) |
| 五所川原市立図書館 |
| 弘前市教育センター |
| 十和田市現代美術館 |
| むつ市立図書館 |
| 八戸市美術館建設準備室 |

教員研修

美術館と連携した鑑賞教育について教員の理解を深めるため、当館のコレクションや鑑賞指導法（アートカードの活用、ギャラリートーク演習等）などをテーマに、県総合学校教育センター、市町村教育委員会図工及び美術等教科研究会との連携講座を実施している。

※本年度は、実施実績なし。

鑑賞サポーターの育成

学校団体鑑賞ツアーで来館した児童・生徒の鑑賞指導にあたる鑑賞サポーター（平成22年度までの「ファシリテーター」を呼称変更。）を配置・養成し、多くの学校団体の受入・指導を行っている。

令和2年度3月末現在：19人

※本年度は、新型コロナウイルス感染拡大状況を鑑み、活動休止とした。

サポートスタッフ

概要

青森県立美術館では、県民が美術館の活動に積極的に参加できるよう常に工夫し、「県民とともに活動する」ことを目指している。その取り組みの一つとして、美術館の様々な事業等の運営に参加、協力するボランティアを「サポートスタッフ」として募集し、各種イベント運営や、管理事務の補助、環境安全整備等、幅広いボランティア活動の展開を図っている。

募集・登録

募集概要

募集期間：2月3日（月）－3月6日（金）

応募要件：

- ・満18歳以上（2020年4月1日現在）。未成年は保護者の承諾が必要。
- ・美術館活動に関心があり、積極的に学び活動する意欲のあること。

登録者数：81人（令和2年度末現在）

※このうち県美コンシェルジュ活動希望者26人

活動内容

1 研修

第1回研修会を4月11日（土）10:00 - 15:30で実施することを予定していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大状況を受けて中止することとし、資料送付をもって研修に代えた。

※本年度はサポートスタッフ研修を全て中止し、資料送付をもって研修に代えた。

2 サポート活動

(1) 教育普及（こどもアトリエ準備）

活動日数：1日

参加人数：7人

(2) 舞台芸術（広報物発送作業等）

活動日数：3日

参加人数：20人

(3) 運営管理（資料整理等）

活動日数：10日

参加人数：92人

3 サポートスタッフ自主企画イベントの実施 - Our place

～アートで繋がるコミュニティ～

例年は、アート活動を行っているサポートスタッフの作品展示や、展示作品に関連したおりがみ・スタンプあそび、クリスマスカードづくりなどのワークショップ、コンサートも行う自主企画イベントを開催しているが、本年度は、サポートスタッフの作品展示の他、竹浪比呂央ねぶた研究所と青森県立美術館サポートスタッフの共同制作によるクリスマスツリーを美術館エントランスロビーに設置した。

(1) 共同制作のためのワークショップ「小さなサンタクロース作り」

日時：12月1日（火）10:00 - 12:00/14:00 - 16:00,
12月11日（金）13:30 - 15:00

場所：ワークショップA, B

参加人数：12月1日 21人、12月11日 18人

(2) 作品展示

会期：サポートスタッフ作品展示

12月11日（金）－13日（日）、

18日（金）－20日（日）

クリスマスツリー展示

12月11日（金）－25日（金）

場所：コミュニティギャラリーB, C、

エントランスギャラリー



12月1日 Our place 「小さなサンタクロース作り」紙貼りワークショップ



12月11日 Our place 「小さなサンタクロース作り」色付けワークショップ



Our place サポートスタッフ作品展示



Our place クリスマスツリー展示 ツリー制作者の竹浪比呂夫氏と手塚茂樹氏

パフォーマンスアート

演劇

音楽

映画

演劇

総合芸術空間魅力体感推進事業

1 事業概要

舞台芸術部門については、当館開館時に掲げた当館のミッションである「優れた芸術を体感できる」機会を提供するため、演劇・音楽・ダンス等を多岐にわたり実施しており、また「県民とともに活動する」ミッションのもと、県民参加型演劇を制作してきた。その会場としては、芸術の融合を象徴する場であるアレコホールにおいて多く展開してきたところである。

本事業は、総合芸術空間としてのアレコホールの魅力を発信するべく、絵画・演劇・音楽・ダンスの全ての要素が融合した総合芸術の集大成として2021年度に音楽劇「4枚の絵」(仮)を上演するものである。

2020年度は、音楽劇に出演する俳優を県民から選考するオーディションのほか、出演俳優として選考された者のスキルアップのためのワークショップ及び出演俳優によるアトリエ公演を実施した。

2 オーディション兼演劇ワークショップ

津軽、県南、下北の県内3地域(むつ市、青森市、八戸市)でオーディションを実施した。また、舞台上での発声や身体表現の基礎を学ぶ演劇ワークショップも併催した。

(1) 募集概要

参加資格

- ・演劇の基礎的な身体表現を学んでみたい方。
 - ・応募時点で20歳以上の県内にお住まいの方。
- ※性別・演劇経験の有無等は問わない。

参加料 無料

※交通費や食費等は参加者負担。

応募方法

参加申込書に必要事項を記入のうえ、E-mail、FAX または郵送により提出。

受付期間

2020年9月1日(火) - 10月8日(木) 必着

オーディション選考人数

- ・全会場を通して、4名(男性2・女性2)程度。

選考方法

- ・演劇ワークショップでの歩行・発声・朗読等の様子及びワークショップ後に行う個別面接により選考。
- ・選考結果は、令和2年11月16日(月)以降、個別面接参加者全員へ郵送で連絡。

日時・会場

- ・2020年10月18日(日) 下北文化会館(むつ市)
 - ・2020年10月24日(土) 県立美術館シアター(青森市)
 - ・2020年10月25日(日) 友の会福祉会館(八戸市)
 - ・2020年10月31日(土) 県立美術館シアター(青森市)
- ※各会場13:00 -。
- ※24日が申込者多数となったため、申込者の一部の参加日を31日(土)へ振り替え実施。

ワークショップ講師

- ・長谷川孝治(劇作家・演出家)

その他

- ・参加者を被保険者とする傷害保険に加入。
- ・新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として、発熱時・体調不良時の参加の遠慮、館内でのマスク着用、手指消毒、社会的距離の確保を協力要請。

(2) 結果

ワークショップ参加者: 51名

(内訳: 青森会場28名、八戸会場5名、むつ会場18名)

うちオーディション参加者: 26名

(内訳: 青森会場20名、八戸会場2名、むつ会場4名)

選考者: 4名

(3) 広報

宣材物

- ・チラシ (A4版/カラー・白黒) 5,000枚
- ・ポスター (B2版/カラー) 200枚

広報

- ・8月中旬に美術館ホームページへ掲載
- ・8月中旬から青森県内の大学・文化施設・商店等へのチラシ・ポスターの設置・掲示を依頼
- ・青森県内市町村広報紙(38紙)への掲載
- ・報道機関へのプレスリリース
- ・県広報ラジオでの周知

3 音楽劇出演者向けワークショップ

オーディションで出演俳優として選考された4名を対象に、演劇の基礎を学ぶワークショップを実施(全5回)。

日時

- ・2020年11月28日(土)(出演者説明会併催)
- ・2021年1月16日(土)・1月17日(日)・2月27日(土)・2月28日(日) 各日13:30 -

会場：青森県立美術館スタジオ
 講師：長谷川孝治（劇作家・演出家）

4 アトリエ公演

オーディションで俳優として選考された4名の者の稽古・演劇スキルアップを目的に、アトリエ公演を実施。

(1) 公演概要

公演名：音楽劇「4枚の絵」出演者アトリエ公演ドラマリーディング

構成・演出：長谷川孝治（演出家・劇作家）

演目：「佐々木君」

「港立裏町図書館」

「津軽の詩、写真の声」

日時：2021年3月13日（土）14：00開演

会場：青森県立美術館シアター

観客動員：計20人

※一般公開はせず、参集者は、出演者の知人、県立美術館ドラマリーディングクラブ員、県立美術館職員等に限定するクローズド公演とした。

入場料：無料

出演：木村英雄、蛭名みどり、伊瀬川尚美、上林有紀（令和3年度音楽劇「4枚の絵」出演俳優）

主催：青森県立美術館パフォーミングアーツ推進実行委員会、青森県立美術館

(2) 広報宣伝、営業概要

宣材物作成枚数：チラシ（A4版／カラー・白黒）60枚

(3) 予約

Eメール又はFAXで予約を受け付けた。

(4) 稽古

日時：2021年3月6日（土）、3月10日（水）、3月12日（金）

※6日は13：30ー、10日・12日は19：00ー

場所：県立美術館シアター



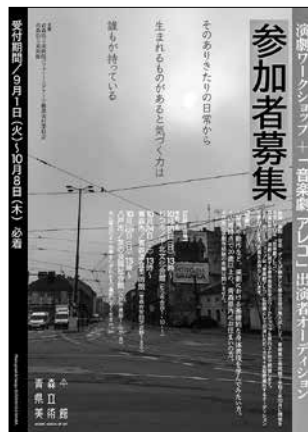
オーディション兼ワークショップ青森会場



オーディション兼ワークショップ八戸会場



オーディション兼ワークショップむつ会場



オーディション兼ワークショップ募集チラシ（オモテ）



オーディション兼ワークショップ募集チラシ（ウラ）



出演者俳優向けワークショップ



アトリエ公演チラシ (オメテ)



アトリエ公演チラシ (ウラ)



アトリエ公演

ドラマリーディングクラブ事業

1 ドラマリーディングクラブ

県立美術館に県民が積極的に参加できる環境を舞台芸術企画部門からアプローチする。

「青森県立美術館ドラマリーディングクラブ(2009年設立)」は、経験や技術の枠にとらわれない幅広い年齢層の県内在住者を参加対象に、オリジナルの戯曲や詩・小説、その他の文章を用いた朗読形式による公演を実施している。

令和2年度は、青森県立美術館ドラマリーディングクラブ員の人数が年々減少していること等を受け、新規クラブ員の募集についての積極的な広報を行ったところ新規加入者が16名増え、クラブ員総数は25名となった。

設立：

平成21年度

参加条件：

- ・青森県立美術館での稽古に参加できること
- ・年齢・経験不問(未成年者は保護者の同意が必要)
- ・年間に最低1公演には参加できる
- ・交通費や食費等など、活動に際して個人に係るものは全て自己負担

活動場所：

青森県立美術館施設内を基本とする。

募集期間：

募集定員に達するまで随時募集

定員：

50名(欠員が出た場合は補充)

参加料：

無料(交通費・食費等の個人に係るものは全て自己負担となる。)

選考方法：

書類選考とし、書類受理後に随時面談を行う。

稽古内容・日程：

- ・青森県立美術館パフォーミングアーツ専門スタッフの指導のもと、オリジナルの戯曲や既成の詩・小説、その他の文章を使い、空間を意識しつつ朗読する。
- ・定期公演に向けた稽古を実施する。
- ・青森県立美術館企画サポート公演に向けた稽古を実施する。
- ・その他公演に向けた稽古を実施する。

2 定期公演

(1) 新規ドラマリーディングクラブ員募集

募集期間：2020年9月1日(火) - 10月23日(金)

面談：応募者と随時実施

新規加入者：16名

募集に向けた広報活動

①宣材物

- ・チラシ(A4版/カラー)：5,000枚

②広報

- ・8月中旬から県内高等学校、大学、図書館、文化施設、商業施設等へ宣材物を配布。
- ・県内新聞・各市町村広報紙において公演告知。
- ・美術館ホームページに掲載。

(2) 新規クラブ員を対象とした基礎ワークショップ

日時：2020年10月28日(水)、11月1日(日)、
11月4日(水)、11月8日(日)

※10月28日・11月4日は18:30 -、11月1日・
8日は13:00 -

会場：青森県立美術館シアター

参加者：計59名

(3) 定期公演概要

公演名：青森県立美術館ドラマリーディングクラブ定期公演
「いき」

日時：2020年12月5日(土)・6日(日)

各日15:00開演(14:00開場・受付開始)

会場：青森県立美術館シアター

席数：53席(全席指定)

脚本・構成・演出：長谷川孝治(劇作家・演出家)

引用：九鬼周造『「いき」の構造』

福士りか『フェザースノー』、『“り”の系譜』、
『サント・ネージュ』

音響・照明：寺山紀幸、佐藤牧人

写真・映像：三浦孝治

出演：12月5日(土)

寺山映夢、山内省吾、齋藤史乃、菊池菜美、永澤恵里、
佐藤水月、佐井由美子、須藤真由美、上林有紀、古川
史生(計10名)

12月6日(日)

金恵美子、田中昌子、小野寺圭子、福田寿枝、今ゆき子、
盛桜華、三上由美子、福村彩乃、石岡博之(計9名)

観客動員数：61名

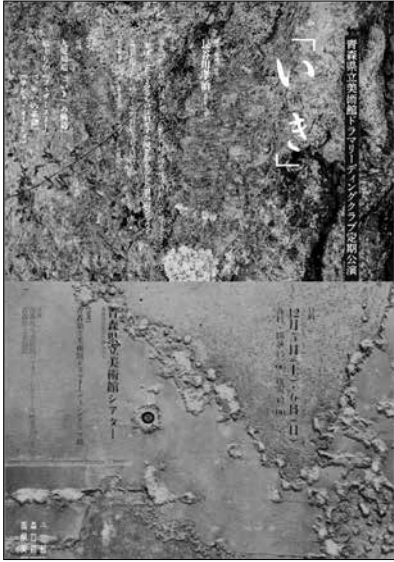
広報活動

①宣材物：

- ・チラシ：(A4版/カラー) 10,000枚
- ・ポスター：(B2版/カラー) 100枚

②広報：

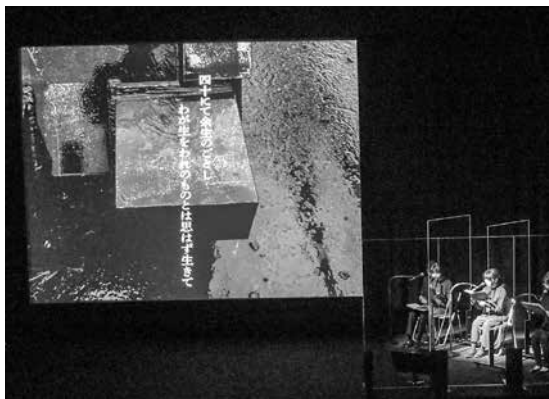
- ・10月中旬から宣材物の配布開始。
- ・県内新聞・各市町村広報誌において公演告知。



定期公演チラシ (オモテ)



定期公演チラシ (ウラ)



定期公演

音楽

アレコホール定期演奏会 2020

「シャガールを、弾く。～第二章～」

1 事業概要

毎年好評をいただいている、アレコホールでの演奏会を本年度も開催。『アレコホール定期演奏会 2020「シャガールを、弾く。～第二章～」』と題し、公演を実施した。

今回の公演では、昨年引き続きピアニストの高実希子氏とヴァイオリニストの三上亮氏が出演し、マルク・シャガール作の舞台背景画全4作品が展示された巨大空間で、さらに深みを増した「シャガール」の世界が奏でられた。

(1) 日時：2020年11月21日（土）

開演 18:00 開場 17:30

(2) 会場：アレコホール

(3) 席数：96席（全席指定）

(4) 入場料金：一般 2,000円

学生 1,000円

※当日券の販売はなし

(5) 主催：青森県立美術館パフォーミングアーツ推進実行委員会、青森県立美術館

2 広報宣伝、営業概要

(1) 宣材物作成枚数：

チラシ（A4版／カラー）15,000枚

ポスター（B2版／カラー）150枚

(2) 広報：

（2020年10月上旬から宣材物配布開始）

- ・PA顧客へダイレクトメールを送付。
- ・青森県内の大学・文化施設・教育機関・道の駅・音楽教室・各商店街等を中心に広報物を配布し、掲示を依頼。
- ・青森県立美術館のホームページ・ブログ・Facebook等、ウェブ上での公演情報の発信。
- ・青森県の広報枠を使用した、FMラジオ番組での公演情報の発信。

3 チケット予約・販売

インターネット外部サイト「GETTIIS」で行い、コンビニエンスストアでの発券とした。

当該サイトでの予約ができない方には、事務局が電話で受け付け、チケット代行予約を行った。

4 公演詳細

(1) 出演者（演奏者）：高実希子（ピアノ）

三上亮（ヴァイオリン）

(2) 演奏曲目：

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

ハフナー・セレナーデより ロンド

演奏：高実希子、三上亮

ジュリオ・カッチーニ

アヴェ・マリア

演奏：高実希子、三上亮

ジョゼフ・アクロン

ヘブライの旋律 作品33

演奏：高実希子、三上亮

ジュール・マスネ

タイスの瞑想曲

演奏：高実希子、三上亮

シャルル・トレネ＝アレクシス・ワイセンベルク

パリの四月

演奏：高実希子

カタルーニャ民謡

鳥の歌

演奏：高実希子、三上亮

バブロ・サラサーテ

ツィゴイネルワイゼン 作品20

演奏：高実希子、三上亮

休憩（20分）

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

バガテル《エリーゼのために》WoO.59 イ短調

演奏：高実希子

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

ヴァイオリンソナタ第9番 イ長調 作品47

《クロイツェル》

第1楽章 Adagio sostenuto-Presto

第2楽章 Andante con variazioni

第3楽章 Presto

演奏：高実希子、三上亮

【アンコール】

ジョン・ウィリアムズ

シンドラのリスト

演奏：高実希子、三上亮

(3) 観客動員：86人 (90%)

5 演奏家プロフィール

高実希子 (ピアノ)

北海道函館市出身。桐朋女子高等学校音楽科、桐朋学園大学首席。パリ国立高等音楽院卒業。ショパン国際ピアノコンクール in ASIA 大学生部門最高位他、国内外での受賞歴多数。ソリスト、室内楽奏者としてフランス・ベルギー・イタリア・ロシア等海外から招聘他、国内外の著名演奏家と共演を重ねる。(公社)日本演奏連盟会員。

三上亮 (ヴァイオリン)

東京藝術大学音楽学部首席卒業後、アメリカ南メソヂスト大学メドゥズ音楽院、ローザヌ高等音楽院等で研鑽を積む。日本音楽コンクール、ブリテン国際ヴァイオリンコンクールなどで受賞。元札幌交響楽団コンサートマスター。現在ヴィルタスクワルテット、サイトウキネンメンバー、東京藝術大学非常勤講師。これまでに「ツィガーヌ」「奏」など5枚のCDをリリース。使用楽器は1628年製ニコロアマティ。

6 新型コロナウイルス感染症対策

- ・ 来場者の氏名、連絡先の把握のため、チケット全てインターネット (外部サイト GETTIS) で行い、座席は全席指定制、当日券の販売は無し。
- ・ 感染者が発生した場合など必要に応じて保健所等の公的機関へ氏名・緊急連絡先が提供され得ること、来場を控えてもらうケース等をチラシ、ホームページで周知。
- ・ 検温の実施 (37.5℃以上の場合に入場不可)。
- ・ 館内での咳エチケット、マスク着用、手洗い・手指消毒、社会的距離の確保の要請。
- ・ 接触確認アプリ (COCOA) の導入要請。
- ・ 会場内の消毒。
- ・ 空調稼働による換気の徹底。
- ・ 出演者・スタッフの氏名・緊急連絡先を名簿化。
- ・ 託児サービスは行わない。
- ・ 休憩時の飲料販売は行わない。
- ・ パンフレット・チラシ・アンケート・ブランケットは、客席に予め設置し、手渡ししない。
- ・ チケットのもぎりは、来場者自身が行う。
- ・ 出演者への面会、お花、贈り物をご遠慮いただく。
- ・ 通常より前後左右の間隔をあけた観客席の設置 (200席→96席)。
- ・ 物販、出演者による見送りは行わない。



定期演奏会チラシ (オモテ)



定期演奏会チラシ (ウラ)



定期演奏会の様子

総合芸術空間魅力体感推進事業

1 事業概要

舞台芸術部門については、当館開館時に掲げた当館のミッションである「優れた芸術を体感できる」機会を提供するため、演劇・音楽・ダンス等を多岐にわたり実施しており、また「県民とともに活動する」ミッションのもと、県民参加型演劇を制作してきた。

その会場としては、芸術の融合を象徴する場であるアレコホールにおいて多く展開してきたところである。

本事業は、総合芸術空間としてのアレコホールの魅力を発信するべく、絵画・演劇・音楽・ダンスの全ての要素が融合した総合芸術の集大成として2021年度に音楽劇「4枚の絵」(仮)を上演するものである。

2020年度は、音楽劇「4枚の絵」プレコンサート及びアレコホールピアノ演奏体験会を実施した。

2 音楽劇「4枚の絵」プレコンサート

2021年度に開催予定の音楽劇「4枚の絵」(仮)の機運醸成のため、本公演にも出演する演奏家によるコンサートを実施した。マルク・シャガール作の舞台背景画全4作品が展示された巨大空間で、バレエ「アレコ」にも用いられたチャイコフスキーのピアノ三重奏曲イ短調作品50などが演奏された。

また、新型コロナウイルス感染予防対策のため観客席数を通常より少なくし開催したため、当公演の様子をライブ配信し、自宅でコンサートを楽しめる環境を提供した。

(1) 概要

日時：2021年1月30日(土)・31日(日)

開演 18:00 開場 17:30

会場：アレコホール

席数：96席(全席指定、1公演あたり)

入場料金：一般 3,000円

学生 2,000円

※当日券の販売はなし

主催：青森県立美術館パフォーミングアーツ推進実行委員会、青森県立美術館

(2) 広報宣伝、営業概要

宣材物作成枚数：

チラシ (A4版/カラー) 15,000枚

ポスター (B2版/カラー) 150枚

広報：

(2020年12月中旬から宣材物配布開始)

- ・PA顧客へダイレクトメールを送付。
- ・青森県内の大学・文化施設・教育機関・道の駅・音楽教室・各商店街等を中心に広報物を配布し、掲示を依頼。
- ・青森県立美術館のホームページ・ブログ・Facebook等、ウェブ上での公演情報の発信。
- ・青森県の広報枠を使用した、FMラジオ番組での公演情報の発信。

(3) チケット予約・販売

インターネット外部サイト「GETTIIS」で行い、コンビニエンスストアでの発券とした。

当該サイトでの予約ができない方には、事務局が電話で受け付け、チケット代行予約を行った。

(4) 公演詳細

出演者(演奏者)：高実希子(ピアノ)

三上亮(ヴァイオリン)

大山平一郎(ヴィオラ)

金子鈴太郎(チェロ)

演奏曲目：

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

ピアノ四重奏曲第2番 変ホ長調 K.493

第1楽章 Allegro

第2楽章 Larghetto

第3楽章 Allegretto

演奏：高実希子、三上亮、大山平一郎、金子鈴太郎

クロード・アシル・ドビュッシー

前奏曲集第1巻より

音と香りは大気に漂う

雪の上の足跡

西風の見たもの

演奏：高実希子

休憩(20分・アレコ特別鑑賞プログラム上映)

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー

ピアノ三重奏曲 イ短調 作品50

《偉大な芸術家の思い出に》

演奏：高実希子、三上亮、金子鈴太郎

【アンコール】

ガブリエル・ユルバン・フォーレ

ピアノ四重奏曲第1番 ハ短調 作品15より

第3楽章

演奏：高実希子、三上亮、大山平一郎、金子鈴太郎

観客動員：142人(30日68人・31日74人、74%)

(5) 演奏家プロフィール

高実希子(ピアノ)

北海道函館市出身。桐朋女子高等学校音楽科、桐朋学園大学首席。パリ国立高等音楽院卒業。ショパン国際ピアノコンクール in ASIA 大学生部門最高位他、国内外での受賞歴多数。ソリスト、室内楽奏者としてフランス・ベルギー・イタリア・ロシア等海外から招聘他、国内外の著名演奏家と共演を重ねる。(公社)日本演奏連盟会員。

三上 亮 (ヴァイオリン)

東京藝術大学音楽学部首席卒業後、アメリカ南メソディスト大学メドウズ音楽院、ローザンヌ高等音楽院等で研鑽を積む。日本音楽コンクール、ブリテン国際ヴァイオリンコンクールなどで受賞。元札幌交響楽団コンサートマスター。現在ヴィルタスクワルテット、サイトウキネンメンバー、東京藝術大学非常勤講師。これまでに「ツィガーヌ」「奏」など5枚のCDをリリース。使用楽器は1628年製ニコロアマティ。

大山 平一郎 (ヴィオラ)

英国ギルドホール音楽演劇学校卒業。LAフィルの首席ヴィオラ奏者、副指揮者、ラホイヤ室内楽音楽祭、サンタフェ室内音楽祭の芸術監督、カリフォルニア大学教授を歴任。九州交響楽団常任指揮者、大阪交響楽団で音楽顧問・首席指揮者、ながさき音楽祭音楽監督を歴任。福岡市文化賞、文化庁の芸術祭優秀賞。現在、一般社団法人 Music Dialogue 芸術監督。CHANEL Pygmalion Days 室内楽シリーズ芸術監督。米国 Lobero Theater 室内楽音楽祭 芸術監督。

金子 鈴太郎 (チェロ)

桐朋学園ソリスト・ディプロマコースを経て、ハンガリー国立リスト音楽院に学ぶ。国内外のコンクールで優勝、入賞。2003年～2008年大阪交響楽団特別首席チェロ奏者。現在は各オーケストラにゲスト首席として招聘されるほか、サイトウ・キネン・オーケストラ等で活躍中。トウキョウ・モーツァルトプレイヤーズ首席、長岡京室内アンサンブル、東京バロックプレイヤーズ各メンバー。Music Dialogue アーティスト。

(6) 新型コロナウイルス感染症対策

- ・ 来場者の氏名、連絡先の把握のため、チケット全てインターネット（外部サイトGETIIS）で行い、座席は全席指定制、当日券の販売はなし。
- ・ 感染者が発生した場合など必要に応じて保健所等の公的機関へ氏名・緊急連絡先が提供され得ること、来場を控えてもらうケース等をチラシ、ホームページで周知。
- ・ 検温の実施（37.5℃以上の場合に入場不可）。
- ・ 館内での咳エチケット、マスク着用、手洗い・手指消毒、社会的距離の確保の要請。
- ・ 接触確認アプリ（COCOA）の導入要請。
- ・ 会場内の消毒。
- ・ 空調稼働による換気の徹底。
- ・ 出演者・スタッフの氏名・緊急連絡先を名簿化。
- ・ 託児サービスは行わない。
- ・ 休憩時の飲料販売は行わない。
- ・ パンフレット・チラシ・アンケート・ブランケットは、客席に予め設置し、手渡ししない。
- ・ チケットのもぎりは、来場者自身が行う。
- ・ 出演者への面会、お花、贈り物をご遠慮いただく。
- ・ 通常より前後左右の間隔をあけた観客席の設置（200席→96席）。
- ・ 物販、出演者による見送りは行わない。



プレコンサートチラシ (オモテ)



プレコンサートチラシ (ウラ)



プレコンサートの様子

3 アレコホールピアノ演奏体験会

未来を担う中高生等が高度な芸術に親しむ機会を創出するため、アレコホールでピアノに触れられる「アレコホールピアノ演奏体験会」を開催した。

(1) 概要

日時：2021年2月11日(木・祝)・12日(金)・13日(土)・14日(日)・19日(金)・20日(土)・21日(日)
16:00 - 17:00

会場：アレコホール

体験時間：1人15分以内

定員：各日、最大3人(3人×7日間=最大21人)

※書類選考

参加料：無料

参加者募集期間：

2020年11月21日(土) - 2021年1月4日(月)

主催：青森県立美術館パフォーミングアーツ推進実行委員会、
青森県立美術館

(2) 広報宣伝、営業概要

宣材物作成枚数：

チラシ (A4版/カラー) 5,000枚

ポスター (B2版/カラー) 150枚

広報：

(2020年11月下旬から宣材物配布開始)

- ・青森県内の大学・文化施設・教育機関・道の駅・音楽教室・各商店街等を中心に広報物を配布し、掲示を依頼。
- ・青森県立美術館のホームページ・ブログ・Facebook等、ウェブ上での公演情報の発信。

(3) 応募条件

以下の全てを満たす者を対象とする。

- ・ピアノの学習に前向きに取り組んでいること。(ソナチネ以上の教本を勉強中)
- ・小学校・中学校・高等学校・大学等の学生であること。
- ・事務局指定の時間に、美術館に来館し、ピアノ演奏出来ること。

(4) 参加者数：21人

(5) 新型コロナウイルス感染症対策

感染者が発生した場合など必要に応じて保健所等の公的機関へ氏名・緊急連絡先が提供され得ること、来場を控えてもらうケース等をチラシ、ホームページで周知。



体験会募集チラシ (オモテ)



体験会募集チラシ (ウラ)



体験会観覧者用チラシ



体験会の様子

舞台芸術情報発信強化事業

1 事業概要

会場に来られない方でも公演を鑑賞できるよう美術館初の試みとして有料ライブ配信を実施した。また、コンサートの様子や美術館の建築としての魅力をまとめたPR動画を作成し公開した。

2 有料ライブ配信

2021年1月30日(土)・31日(日)開催の、音楽劇「4枚の絵」プレコンサートで有料のライブ配信を行った。また公演終了後にアーカイブ配信を行った。

(1) 概要

テスト配信：

2020年11月21日(土)開催のアレコホール定期演奏会で、テスト配信を行った。

有料ライブ配信：

2021年1月30日(土)・31日(日) 17:30 -

アーカイブ配信：

2021年1月31日(日) 0:00 - 2月7日(日) 23:59

料金：1,500円

(2) 広報宣伝、営業概要

音楽劇「4枚の絵」プレコンサートチラシ裏面に概要記載。

広報活動は音楽劇「4枚の絵」プレコンサートと同。

(3) チケット予約・販売

インターネット外部サイト「TIGET」で行った。

販売期間：2020年12月21日(月) - 2021年1月29日(金)

チケット販売数：54枚

延べ視聴数：423回

3 PR動画作成

2021年1月30日(土)・31日(日)開催の、音楽劇「4枚の絵」プレコンサートの様子、及びアレコホールを中心とした美術館の建物の魅力を紹介する、約18分のPR動画を作成し公開した。

公開日：2021年3月23日(火)

公開先：美術館ホームページ

媒体：YouTube



PR動画の公開

映画

国立映画アーカイブによる「優秀映画鑑賞推進事業」の一環で、令和3年1月9日（土）から1月11日（月・祝）の3日間、35ミリフィルムによる映画上映会を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大等の影響を勘案し中止とした。

※広報前に中止決定したため宣材物等は無し。

サービス等

貸館

図書室

キッズルーム

博物館実習

サポートシップ倶楽部

貸館

使用施設について

(1) 使用目的

展覧会や作品の創作活動、映像、演劇及び音楽などの芸術活動の発表、練習の場として本県の芸術振興に資する使用であること。

(2) 使用料

① 展示施設を使用する場合

■ コミュニティギャラリー

| 室名 (面積) | 使用料 (入場料等を徴収しない場合) | | |
|-------------|--------------------|---------------|------------|
| | 9:30 - 12:00 | 13:00 - 17:00 | 左記以外の時間帯 |
| A (148.76㎡) | 2,200 円 | 3,520 円 | 1 時間 880 円 |
| B (60.47㎡) | 900 円 | 1,440 円 | 1 時間 360 円 |
| C (131.30㎡) | 1,950 円 | 3,120 円 | 1 時間 780 円 |

- ※ 1 入場料等を徴収する場合は、上記使用料の2倍とします。
- ※ 2 コミュニティギャラリーの1室が使用されている場合、他のコミュニティギャラリーが使用できない場合があります。

■ 企画展示室

| 室名 (面積) | 使用料 (入場料等を徴収しない場合) | | |
|--------------|--------------------|---------------|--------------|
| | 9:30 - 12:00 | 13:00 - 17:00 | 左記以外の時間帯 |
| A (182.70㎡) | 2,580 円 | 4,120 円 | 1 時間 1,030 円 |
| B (140.39㎡) | 2,080 円 | 3,320 円 | 1 時間 830 円 |
| C (389.51㎡) | 5,750 円 | 9,200 円 | 1 時間 2,300 円 |
| D (228.06㎡) | 3,380 円 | 5,400 円 | 1 時間 1,350 円 |
| E (105.91㎡) | 1,550 円 | 2,480 円 | 1 時間 620 円 |
| 映像室 (70.38㎡) | 1,030 円 | 1,640 円 | 1 時間 410 円 |

- ※ 1 入場料等を徴収する場合は、上記使用料の2倍とします。
- ※ 2 企画展示室の使用については、原則として県立美術館との共催事業に限ります。

② シアター等を使用する場合

| 室名 (面積) | 使用料 (入場料等を徴収しない場合) |
|------------------------|--------------------|
| シアター (220 席) (348.20㎡) | 1 時間 2,500 円 |
| 映写室 (36.36㎡) | 1 時間 260 円 |
| アナウンスペース (6.35㎡) | 1 時間 50 円 |
| ワークショップ A (124.38㎡) | 1 時間 930 円 |
| ワークショップ B (185.28㎡) | 1 時間 1,350 円 |
| 暗室 (22.45㎡) | 1 時間 160 円 |
| スタジオ (100.98㎡) | 1 時間 750 円 |
| 映像編集室 (24.77㎡) | 1 時間 180 円 |
| スタジオ映写室 (28.88㎡) | 1 時間 210 円 |

- ※ 1 入場料等を徴収する場合は、上記使用料の2倍とします。
- ※ 2 暗室は、ワークショップ A を利用する場合又はワークショップ A が利用されていない場合に使用できます。
- ※ 3 映写室、アナウンスペースは、シアターを利用する場合、使用できます。
- ※ 4 映像編集室、スタジオ映写室は、スタジオを利用する場合、使用できます。
- ※ 5 シアター借用時は映写室も併せて借用いただけます。
- ※ 6 令和2年度は、ワークショップ A、B 及びスタジオ、スタジオ映写室の使用は停止しました。

(3) 使用期間

① 展示施設

- ・コミュニティギャラリーは、原則として、月曜日始まり、日曜日終わりの1週間単位での使用期間とし、同一の利用者について引き続き5週間を超えることはできません。
- ・企画展示室については、原則として、1週間単位での使用期間とし、同一の利用者について引き続き5週間を超えることはできません。

② シアター等

- ・1時間単位での使用期間とし、同一の利用者について原則として引き続き10日を超えることはできません。
- *美術館のすべての施設において
 - ・美術館の休館日は、原則として使用できません。(準備、撤去作業の場合は除く。)
 - ・毎年度日数を定めて開催している展覧会や上記使用期間では開催目的が達成されない場合において必要と認められるときは、使用期間を変更できるものとします。

(4) 使用時間

- ①美術館の施設使用時間は、美術館の開館時間〔9時30分から17時まで〕とします。なお、施設使用上やむを得ない理由があると認められる場合には、閉館後、1時間単位で20時まで延長することができます。開館時間前の使用については、御相談ください。
- ②施設使用時間には、展覧会等の準備の時間及び撤収の時間も含まれます。(延長した場合であっても20時には撤収が完了していなければなりません。)
- ③展示施設は、9時30分から12時、13時から17時の使用区分とし、それ以外は1時間単位での使用とします。
- ④シアター等は、1時間単位での使用とします。

■コミュニティギャラリー、企画展示室、シアター、スタジオほか

(単位：人)

| 使用期間 | 使用者 | 催事名 | 使用施設 | 入場者数 |
|---------------|----------------------|-------------------------|-----------------|-------|
| 9/1 - 9/6 | 木立 将隆 | 写真展「村境」 | コミュニティギャラリー A | 180 |
| 9/18 - 9/22 | 伊藤 寛 | 津軽三十六景と絵画教室展 | コミュニティギャラリー ABC | 867 |
| 9/30 - 10/26 | 青森放送(株) 山田 健太 | 高野元孝油絵展 | コミュニティギャラリー ABC | 863 |
| 11/10 - 11/15 | 福島 悠起 | 福島悠起×齋藤咲子二人展 | コミュニティギャラリー ABC | 356 |
| 2/11 - 2/22 | (社福) あーど | 青森ありのままの表現展 | コミュニティギャラリー ABC | 614 |
| 2/21 - 2/22 | 青森県誘客交流課 | アンドレ・チャン主演映画「初心」上映会 | シアター | 114 |
| 2/23 - 2/28 | 青 秀祐 | 作品公開制作 | コミュニティギャラリー ABC | 92 |
| 2/27 | | 5 館連携トークイベント | シアター | 74 |
| 3/4 | (株) サムライスピリッツクリエイティブ | 「白神山地 VR 体験×写真展」に係る会場設営 | コミュニティギャラリー A | 12 |
| 3/5 - 3/22 | 自然保護課 | 白神山地 VR 体験×写真展 | コミュニティギャラリー A | 1,170 |

合計 4,342 人

図書室

概要

図書室は、館の美術情報センターとしての機能を担い、その機能のうち美術に関する図書資料情報を収集、整理、保存、提供することで美術の普及を図ることを目的として、一般開放している。

具体的には、美術に関する専門ライブラリとして、来館者に対し、当館所蔵作品・作家に関するものをはじめ、美術に関する知識を深める図書資料情報の提供、閲覧、美術及び図書資料に関する相談受付（レファレンス）、他美術館等の展覧会情報の提供等を行っている。

設備：図書閲覧席 20席

開館日・開室時間：美術館開館日の10:00 - 16:00

図書資料の収集方針

「青森県立美術館作品収蔵基本方針」に準じ、1) 近・現代の青森県出身作家及びゆかりのある作家に関するもの、2) 青森県以外の近・現代の美術状況に対応するために必要な優れた美術作品に関するもの、3) 今に生きる県民の心の原点に関わり、未来に資するもの、4) 1 - 3を理解するために必要なもの、を購入および寄贈により収集した。

蔵書数（令和2年度3月末現在）

- ・美術図書 5,667冊
 - ・デザイン・建築関係図書 490冊
 - ・写真関係図書 917冊
 - ・絵本・イラスト関係図書 1,237冊
 - ・民俗・歴史関係図書 559冊
 - ・音楽・映画・舞台関係図書 1,010冊
 - ・展覧会カタログ 15,344冊
 - ・その他（自然科学、文学など） 2,297冊
 - ・雑誌（約60タイトル） 12,142冊
※継続購入は14タイトル
- 計 39,663冊

サービス

図書資料閲覧

美術に関する映像ソフトの鑑賞

美術に関する図書資料に係る相談受付（レファレンス）

当館に関する情報の掲載誌の閲覧

実績

開室日数：209日

利用者数：1,991人

レファレンス利用件数：7件

令和2年度図書室利用実績

| | 開室日数(日) | | 入室者数(人) | | レファレンス | |
|-----|---------|-------|---------|----|--------|--|
| | 月計 | 月計 | 1日平均 | 月計 | 1日平均 | |
| 4月 | 28 | 293 | 10.5 | 1 | 0.04 | |
| 5月 | 29 | 397 | 13.7 | 0 | 0.00 | |
| 6月 | 28 | 259 | 9.3 | 2 | 0.07 | |
| 7月 | 25 | 355 | 14.2 | 1 | 0.04 | |
| 8月 | 30 | 776 | 25.9 | 2 | 0.07 | |
| 9月 | 25 | 284 | 11.4 | 0 | 0.00 | |
| 10月 | 29 | 175 | 6.0 | 8 | 0.28 | |
| 11月 | 28 | 243 | 8.7 | 4 | 0.14 | |
| 12月 | 20 | 158 | 7.9 | 1 | 0.05 | |
| 1月 | 28 | 192 | 6.9 | 0 | 0.00 | |
| 2月 | 26 | 182 | 7.0 | 0 | 0.00 | |
| 3月 | 24 | 228 | 9.5 | 0 | 0.00 | |
| 計 | 320 | 3,542 | 11.1 | 19 | 0.06 | |

事業

1 美術館事業への支援・事業との連携

当館で行う常設展示及び企画展示と連携し、開催期間中、所蔵図書資料のうち展示に関連する資料を展示用書架にて紹介した。

2 他の美術館・関係団体等との連携

「新着カタログコーナー」にて、新しく受け入れた他美術館の展覧会カタログを継続的に紹介した。

キッズルーム

概要

絵本やお絵かき、積み木などを親子で楽しむことを通じて、子どもたちの美術への関心を高めることを目的として、地下1階「キッズルーム」を、来館者の多い土日祝日と企画展開催時の平日に無料で開放している。

「キッズルーム」は、約600冊の絵本をはじめとして、スイスのnaef（ネフ）社製やおもり木製玩具研究会「わらはんど」製作の色や形の美しい積み木やお絵かきを自由に楽しめる空間となっている。

利用実績

令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、キッズルームを閉室した。

(令和2年3月までの閉室時間は、土日祝日及び企画展開催時の平日10:00 - 15:00)

博物館実習

概要

博物館法施行規則第1条に定められた学芸員資格取得に関する博物館実習を実施した。

実施内容：美術館における諸活動（展示・収蔵・教育普及等）

期間：2020年8月24日（月）－8月28日（金）

実習指導：青森県立美術館職員他

実習生：5名

東北芸術工科大学（1名）、学習院女子大学（1名）、女子美術大学（1名）、武蔵野美術大学（1名）、首都大学東京（1名）

プログラム

令和2年度 博物館（美術館）学芸員実習日程

第1日目 8月24日（月）

- ・オリエンテーション
- ・青森県立美術館の概要について
- ・学芸員の仕事について
- ・施設見学（バックヤードおよび作業導線含む）
- ・美術館のコレクション形成について
- ・地域に根ざした美術館活動について（60分）
- ・実習日誌作成

第2日目 8月25日（火）

- ・作品の保存・管理について
- ・作品の取扱いおよび調書作成（日本画、油彩画、立体、紙作品）
- ・来館者対応と美術館のホスピタリティーについて（1）
→監視の仕事について
- ・来館者対応と美術館のホスピタリティーについて（2）
→新型コロナウイルスへの対応
- ・ディスカッション「保存と展示のあいだで」
- ・実習日誌作成

第3日目 8月26日（水）

- ・展覧会を体験しよう（コレクション展）
- ・展覧会のキュレーションとは
- ・美術館の施設およびサイン計画について
- ・美術館の教育普及活動について
- ・美術館のパフォーミングアーツ活動
- ・実習日誌作成

第4日目 8月27日（木）

- ・演習の前に 1 「モノを集めて見せる練習」
- ・演習の前に 2 「集めて見せたモノについて解説を書いて発表」
- ・[演習] 展覧会を企画してみよう1－テーマ設定、作品リストの完成
- ・[演習] 展覧会を企画してみよう2－普及活動の検討
- ・実習日誌作成

第5日目 8月28日（金）

- ・[演習] 展覧会を企画してみよう3－展示プラン作成
- ・[演習] 展覧会を企画してみよう4－展示上の留意点
- ・[演習] 企画した展覧会を発表してみよう（発表＋講評）
- ・実習日誌作成

サポートシップ倶楽部

概要

青森県立美術館の活動に協力するとともに広く県民の美術その他の芸術文化の向上に寄与するために平成27年度（平成28年3月）に発足した任意団体。

会員の区分と年会費

一般会員

成人会員：3,000円、学生会員（高校生以上）：2,000円、
法人会員：30,000円

特別会員（総会出席）

法人会員：一口100,000円

会員数（令和3年3月31日現在）

一般会員：成人会員75名、学生会員0名、法人会員7団体
特別会員：16法人（41口）

特典

会員への情報提供

一般会員

常設展観覧料無料観覧（法人会員は3名まで同時観覧可能）
企画展観覧料無料招待券配布のほか、いつでも団体料金で観覧可
ミュージアムショップ割引
カフェ割引
等

特別会員

企画展内覧会・レセプション招待
等

令和2年度事業報告

1 美術館活動への支援事業

(1) 美術品購入及び寄贈

多田友充作品を購入し、青森県立美術館へ寄贈した。

(2) 美術資料の充実

美術品寄付のための積み立て。

(3) 美術館ファンの拡大

一般会員の会員特典（観覧料無料）をアピールし、観覧者数の増加を図った。延べ観覧者数236名。

2 県民の美術その他の芸術文化の向上に寄与するための事業

(1) 展覧会関連の講演会・ワークショップ等への協賛等

令和2年度は協賛等なし

(2) 視察研修

新型コロナウイルス感染症対策の影響により中止

3 理事会及び総会の開催について

新型コロナウイルス感染症対策の影響により、会議は開催せず、書面にて必要な議決等を行った。

(1) 第1回理事会

①議決日 令和2年6月15日（月）

②議決方法 書面にて表決

③議事

第1号議案 令和元年度事業報告の件

第2号議案 令和元年度収支決算の件

第3号議案 令和2年度事業計画（案）の件

第4号議案 令和2年度収支予算（案）の件

第5号議案 役員の任期満了に伴う改選の件

④結果

すべての議案について、全役員の賛成をもって可決

(2) 第1回総会

①議決日 令和2年6月27日（土）

②議決方法 書面にて表決

③議事

第1号議案 令和元年度事業報告の件

第2号議案 令和元年度収支決算の件

第3号議案 令和2年度事業計画（案）の件

第4号議案 令和2年度収支予算（案）の件

第5号議案 役員の任期満了に伴う改選の件

④結果

すべての議案について、全特別会員の賛成をもって可決

資料

広報

広聴

入館者数

運営予算・決算

組織

関係規程等

施設設備概要

広報

県の広報媒体を活用した広報活動や、Twitter・Facebook等のソーシャルメディアネットワークによる活動を展開した。

(1) 県広報による実績

- ・青森放送（RAB ラジオ）「県広報タイム」
- ・エフエム青森「あおり・ふぁん」
- ・東奥日報、デーリー東北、陸奥新報「広報あおりけん」
- ・広報広聴課 Facebook「県政トピックス」
- ・コンビニ等から県政情報の発信！

(2) ソーシャルメディア

- ・Twitter
アカウント：aomori_museum_of_art@aomorikenbi
- ・Facebook
アカウント：https://www.facebook.com/aomori.museum
- ・instagram
アカウント：aomorikenbi

(3) ホームページ

URL：http://www.aomori-museum.jp

年間アクセス数（2020.4 - 2021.3）：368,706 件

(4) 雑誌等掲載実績（主なもの、順不同）

- ・ウェブ版美術手帖
- ・美術の窓
- ・和楽
- ・美術展びあ
- ・arch
- ・月刊美術
- ・芸術新潮
- ・美術屋・百兵衛
- ・アートアジェンダ
- ・アートコレクターズ
- ・ウォーカープラス
- ・まっぷる
- ・るるぶ
- ・ことりっぷ
- ・東北じゃらん
- ・大人の休日倶楽部
- ・rakra
- ・ピース函館
- ・あおりのき

・ CasaBRUTUS

・ VOGUE

・ CREA WEB

・ 月刊 MOE

ほか多数

広聴

青森県立美術館アドバイザー・ボード

青森県立美術館のより良い運営を推進するため、青森県立美術館の運営に関して専門的及び県民の立場から必要な助言等を行う第三者委員会を設置。

アドバイザー（順不同）

座長 建島 哲（全国美術館会議会長・多摩美術大学学長・
埼玉県立近代美術館館長）

三上 満良（東北芸術工科大学講師、宮城県美術館
元副館長）

山田 泰子（八戸市新美術館建設推進室室長）

蜷川 有紀（美術家・女優）

三澤 一実（武蔵野美術大学教授）

大嶋 憲通（株式会社リンクステーション代表取締役
社長）

花田 玲子（県民代表）

松下 三恵（県民代表）

会議開催状況

第1回

開催日：2016年3月19日（土）

会場：青森県立美術館

第2回

開催日：2017年2月9日（木）

会場：青森県立美術館

第3回

開催日：2018年3月12日（月）

会場：青森県立美術館

第4回

開催日：2019年2月28日（木）

会場：青森県立美術館

第5回

開催日：2020年3月19日（木）

会場：青森県立美術館

第6回

資料送付日：2021年3月23日（火）（書面開催）

入館者数

(単位：人)

| | H18年度 | H19年度 | H20年度 | H21年度 | H22年度 | H23年度 | H24年度 | H25年度 | H26年度 | H27年度 | H28年度 | H29年度 | H30年度 | R元年度 ① | R2年度 ② | 増減 (②-①) | |
|---------------------|------------------------|---------|---------|---------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|-----------|-----------|-------------|----------|
| 常設展 | 一般観覧者 | 193,501 | 89,229 | 109,609 | 190,672 | 233,192 | 141,904 | 177,266 | 179,793 | 73,541 | 137,198 | 92,714 | 125,342 | 134,453 | 92,807 | 39,216 | △ 53,591 |
| | スクール免除 | 12,685 | 6,968 | 6,668 | 9,098 | 11,574 | 6,777 | 5,798 | 3,712 | 3,845 | 3,530 | 3,295 | 2,448 | 2,612 | 1,898 | 2,868 | 970 |
| | 常設展計 | 206,186 | 96,197 | 116,277 | 199,770 | 244,766 | 148,681 | 183,064 | 183,505 | 77,386 | 140,728 | 96,009 | 127,790 | 137,065 | 94,705 | 42,084 | △ 52,621 |
| 企画展 | シャガール展 | 192,918 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 縄文と現代展 | 14,894 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 工藤甲人展 | 1,680 | 10,950 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 旅順博物館展 | | 30,065 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 舞台芸術の世界展 | | 6,282 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 棟方志功・崔榮林展 | | 4,156 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 寺山修司展 | | | 9,533 | | | | | | | | | | | | | |
| | 大ナポレオン展 | | | 46,609 | | | | | | | | | | | | | |
| | 小島一郎展 | | | 8,660 | | | | | | | | | | | | | |
| | ウィーン展 | | | | 36,884 | | | | | | | | | | | | |
| | (特別展 太宰治と美術展) | | | | (23,191) | | | | | | | | | | | | |
| | 馬場のぼる展 | | | | 25,464 | | | | | | | | | | | | |
| | ラブラブショー | | | | 5,160 | | | | | | | | | | | | |
| | ローマ展 | | | | | 45,622 | | | | | | | | | | | |
| | ロボット展 | | | | | 25,076 | | | | | | | | | | | |
| | 芸術の青森展 | | | | | 3,530 | | | | | | | | | | | |
| | 印象派展 | | | | | | 105,758 | | | | | | | | | | |
| | 今和次郎展 | | | | | | 4,807 | | | | | | | | | | |
| | フィンランド展 | | | | | | | 31,876 | | | | | | | | | |
| | Art and Air 展 | | | | | | | 18,267 | | | | | | | | | |
| | 奈良美智展 | | | | | | | 80,275 | | | | | | | | | |
| | 種差展 | | | | | | | | 16,807 | | | | | | | | |
| | 横尾忠則展 | | | | | | | | 10,516 | | | | | | | | |
| | 日本の民家展 | | | | | | | | 5,115 | | | | | | | | |
| | 工藤哲巳展 | | | | | | | | | 5,056 | | | | | | | |
| | 美少女展 | | | | | | | | | 33,866 | | | | | | | |
| | 関野準一郎展 | | | | | | | | | 8,158 | | | | | | | |
| | 成田亨展 | | | | | | | | | | 18,257 | | | | | | |
| | 化物展 | | | | | | | | | | 32,984 | | | | | | |
| | 「青森EARTH2015 みちの奥へ」 展示 | | | | | | | | | | 3,022 | | | | | | |
| | 棟方志功展 | | | | | | | | | | | 17,427 | | | | | |
| | 日展 | | | | | | | | | | | 19,094 | | | | | |
| | 青森EARTH2016 根と路 | | | | | | | | | | | 11,190 | | | | | |
| | 澤田敦一展 | | | | | | | | | | | 10,195 | | | | | |
| | ラブラブショー 2展 | | | | | | | | | | | | 10,962 | | | | |
| | 遙かなるルネサンス展 | | | | | | | | | | | | 40,188 | | | | |
| 近代洋画展 | | | | | | | | | | | | 6,762 | | | | | |
| シャガール-三次元の世界展 | | | | | | | | | | | | 4,057 | 14,665 | | | | |
| フランスと日本展 | | | | | | | | | | | | | 31,543 | | | | |
| めぐねと旅する美術展 | | | | | | | | | | | | | 16,867 | | | | |
| アルヴァ・アアルト展 | | | | | | | | | | | | | | 12,858 | | | |
| 子どものための建築と空間展 | | | | | | | | | | | | | | 13,431 | | | |
| 青森EARTH2019:いのち耕す場所 | | | | | | | | | | | | | | 5,944 | | | |
| 阿部合成展 | | | | | | | | | | | | | | | 5,354 | | |
| 富野由悠季展 | | | | | | | | | | | | | | | 6,079 | | |
| 企画展計 | 209,492 | 51,453 | 64,802 | 67,508 | 74,228 | 110,565 | 130,418 | 32,438 | 47,080 | 54,263 | 57,906 | 61,969 | 63,075 | 32,233 | 11,433 | △ 20,800 | |
| 教育普及 | スクールプログラム | 18,775 | 9,905 | 9,242 | 7,087 | 7,272 | 7,368 | 6,310 | 5,792 | 3,974 | 4,065 | 4,158 | 2,687 | 3,762 | 2,265 | 3,840 | 1,575 |
| | 普及プログラム | 2,300 | 2,148 | 2,873 | 886 | 718 | 11,763 | 2,565 | 2,744 | 1,575 | 557 | 96 | 851 | 1,692 | 568 | 331 | △ 237 |
| | お出かけ講座 | 1,196 | 1,587 | 1,122 | 1,119 | 537 | 1,250 | 1,022 | 1,245 | 383 | | | | | | 0 | 0 |
| | 展示関係プログラム | | | 625 | 1,526 | 7,546 | 930 | 909 | 1,738 | 932 | 757 | 1,688 | 482 | 549 | 541 | 0 | △ 541 |
| | その他 | 500 | | 464 | 266 | 399 | 387 | 351 | 136 | 440 | 393 | 411 | 1,161 | 285 | 281 | 5 | △ 276 |
| | 教育普及計 | 22,771 | 13,640 | 14,326 | 10,884 | 16,472 | 21,698 | 11,157 | 11,655 | 7,304 | 5,772 | 6,353 | 5,181 | 6,288 | 3,655 | 4,176 | 521 |
| パフォーマンス | 演劇 | 2,170 | 1,821 | 1,516 | 1,333 | 1,085 | 2,962 | 3,468 | 5,255 | 2,258 | 2,140 | 2,163 | 3,054 | 835 | 2,101 | 326 | △ 1,775 |
| | ダンス | | | | 1,089 | 520 | | | 339 | 699 | 662 | 490 | 632 | 602 | | | 0 |
| | 音楽 | 1,559 | 471 | 1,583 | 1,959 | 970 | 979 | 1,133 | 810 | 469 | 479 | 469 | 428 | 573 | 629 | 303 | △ 326 |
| | 映画 | 975 | 1,954 | 1,584 | 685 | | | | 240 | 991 | 503 | 1,024 | 818 | 1,993 | 446 | | △ 446 |
| | パフォーマンスアート計 | 4,704 | 4,246 | 6,102 | 5,066 | 2,575 | 3,941 | 4,601 | 6,644 | 4,417 | 3,784 | 4,146 | 4,932 | 4,003 | 3,176 | 629 | △ 2,547 |
| 貸館 | 10,268 | 26,481 | 194,807 | 104,625 | 144,520 | 20,735 | 33,410 | 126,284 | 26,192 | 71,045 | 58,931 | 28,185 | 47,790 | 11,421 | 4,154 | △ 7,267 | |
| 図書館 | 2,552 | 7,727 | 12,910 | 10,012 | 7,864 | 6,561 | 10,688 | 6,818 | 4,662 | 4,307 | 6,557 | 3,467 | 4,474 | 3,542 | 1,961 | △ 1,581 | |
| キッズルーム | | 2,850 | 3,690 | 3,127 | 3,555 | 20,501 | 15,889 | 4,267 | 2,602 | 3,118 | 3,545 | 2,738 | 3,015 | 1,799 | 15 | △ 1,784 | |
| 合計 | 455,973 | 202,594 | 412,914 | 400,992 | 493,980 | 332,682 | 389,227 | 371,611 | 169,643 | 283,017 | 233,447 | 234,262 | 265,710 | 150,531 | 64,452 | △ 86,079 | |

※ キッズルームは平成19年4月28日からオープン
 ※ 特別展太宰治と美術展入館者数は常設展入館者数に含む

運営予算・決算

令和2年度

一般会計予算額

(単位：千円)

| 事業名 | 収入 | 科目 | 支出 | 細目 | 説明 |
|------|---------|----------|---------|----------|---|
| 美術館費 | 47,866 | 使用料及び手数料 | 171,533 | 職員費 | 人件費 |
| | 12,259 | 国庫支出金 | 512,566 | 美術館運営管理費 | 管理運営費、調査研究費、美術資料収集費、美術資料保存管理費、展示費、教育普及費、情報事業費、パフォーミングアーツ事業費 他 |
| | 100 | 財産収入 | 967 | 公園管理費 | 青森県総合運動公園管理費 |
| | 25,962 | 繰入金 | | | |
| | 72,421 | 諸収入 | | | |
| | 94,000 | 県債 | | | |
| | 432,458 | 一般財源 | | | |
| 合計 | 685,066 | | 685,066 | | |

令和2年度

一般会計決算額

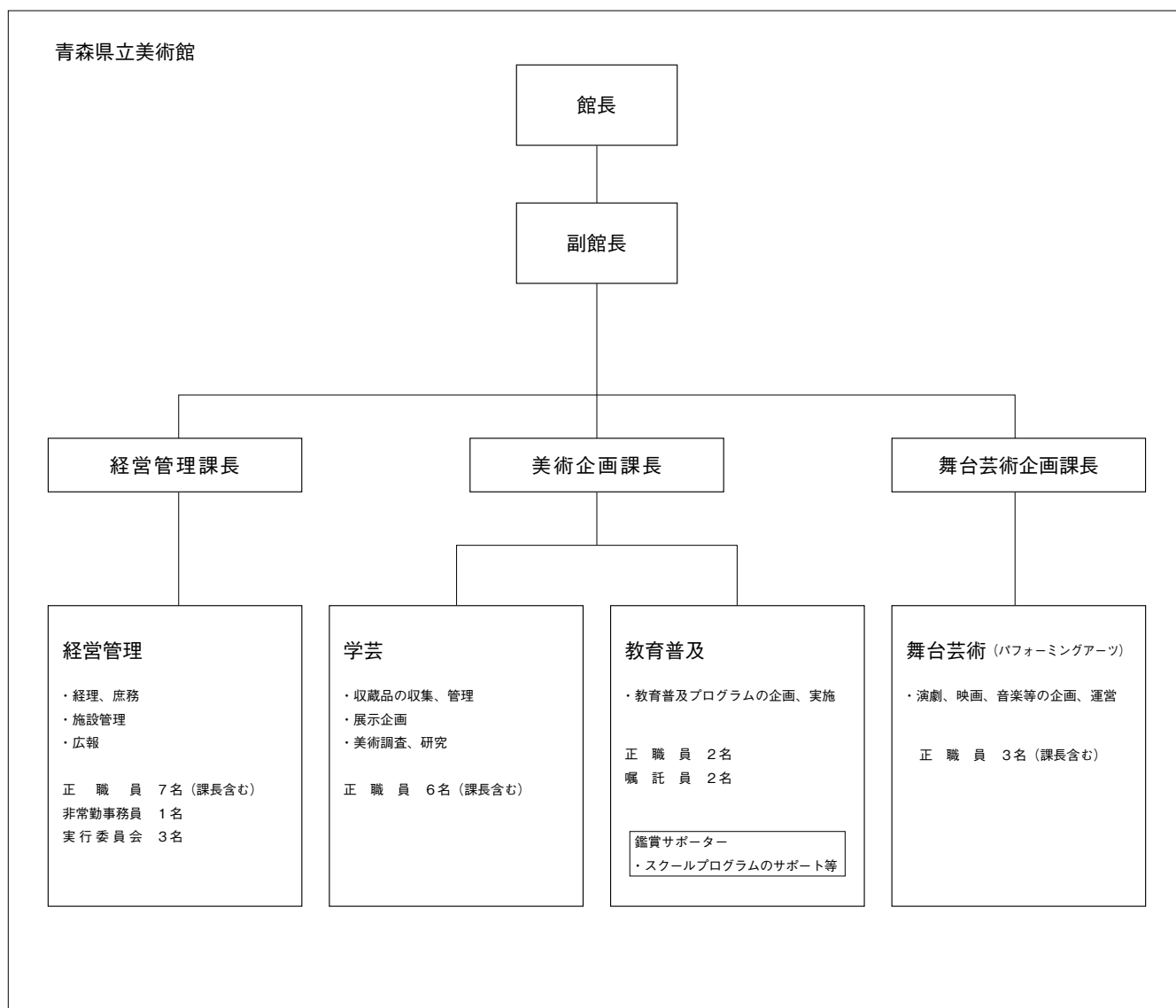
(単位：千円)

| 事業名 | 収入 | 科目 | 支出 | 細目 | 説明 |
|------|---------|----------|---------|----------|---|
| 美術館費 | 17,903 | 使用料及び手数料 | 158,320 | 職員費 | 人件費 |
| | 53,073 | 国庫支出金 | 421,781 | 美術館運営管理費 | 管理運営費、調査研究費、美術資料収集費、美術資料保存管理費、展示費、教育普及費、情報事業費、パフォーミングアーツ事業費 他 |
| | 96 | 財産収入 | 871 | 公園管理費 | 青森県総合運動公園管理費 |
| | 51,426 | 繰入金 | | | |
| | 9,149 | 諸収入 | | | |
| | 21,000 | 県債 | | | |
| | 428,325 | 一般財源 | | | |
| 合計 | 580,972 | | 580,972 | | |

組織

- 県立美術館の運営は、アドバイザー・ボードからの助言を得ながら行っている。
 - 館長及び県職員（非常勤含む）23名の計24名が美術館運営にあたっている。
- このほか、企画展実行委員会職員2名が配置されている。

（令和2年4月1日現在）



関係規程等

青森県立美術館条例

(設置)

第一条 美術その他の芸術の鑑賞及び学習の機会並びに創作活動の場の提供を行うことにより、県民の芸術に関する活動への参画を支援し、もって文化の振興を図るため、青森市に青森県立美術館（以下「美術館」という。）を設置する。

(業務)

第二条 美術館は、次に掲げる業務を行う。

- 一 美術品その他の芸術に関する資料（以下「美術品等」という。）の収集、保管及び展示に関すること。
- 二 美術品等の利用に関し必要な説明、助言及び指導に関すること。
- 三 美術品等に関する専門的、技術的な調査研究に関すること。
- 四 美術品等に関する案内書、解説書、目録、図録、年報、調査研究の報告書等の作成及び配布に関すること。
- 五 美術その他の芸術に関する講演会、講習会、映写会、研究会、公演会等の開催に関すること。
- 六 美術その他の芸術に関する情報の収集及び提供に関すること。
- 七 美術その他の芸術に関する創作活動の場の提供に関すること。
- 八 その他県民の芸術に関する活動への参画を支援するために必要な業務

(使用の承認)

第三条 別表第二号又は第三号に掲げる場合において、美術館の施設を使用しようとする者は、知事の承認を受けなければならない。

(使用料)

第四条 美術館の施設を使用する者（以下「使用者」という。）は、別表に定める使用料を納入しなければならない。

2 知事は、特別の理由があると認めるときは、前項の使用料の全部又は一部を免除することができる。

(使用の制限等)

第五条 知事は、使用者が次の各号のいずれかに該当する場合は、当該使用者の美術館の使用を拒み、その使用の承認を取り消し、又はその使用を制限することができる。

- 一 他の使用者に迷惑をかけ、又はそのおそれがあるとき。
- 二 美術館の施設、設備等をき損し、若しくは汚損し、又はそれらのおそれがあるとき。
- 三 この条例又はこの条例に基づく規則に違反したとき。

2 知事は、前項に規定する場合のほか、美術館の管理運営上支障があると認めるときは、美術館の使用を制限することができる。

(委任)

第六条 この条例に定めるもののほか、美術館の管理に関し必要な事項は、規則で定める。

附則 この条例は、規則で定める日から施行する。

別表（第三条、第四条関係）

一 美術品等の観覧のための使用の場合

| 区分 | 金額（一回につき） |
|--------|--------------------------|
| 常設展の観覧 | 一人につき 千円を超えない範囲内で知事が定める額 |
| 企画展の観覧 | 知事がその都度定める額 |

二 展示施設の使用の場合

イ 入場料その他これに類する料金を徴収しないで使用する場合

| 区分 | 九時三十分から 十二時まで | 十三時から 十七時まで | 九時三十分以前、 十二時から十三時 まで及び十七時以降 |
|--------------|------------------|----------------|-----------------------------------|
| コミュニティギャラリーA | 二千三百十円 | 三千四百円 | 八百五十円 |
| コミュニティギャラリーB | 八百八十円 | 千四百円 | 三百五十円 |
| コミュニティギャラリーC | 千八百八十円 | 三千円 | 七百五十円 |
| 展示室A | 二千五百円 | 四千円 | 千円 |
| 展示室B | 二千円 | 三千二百円 | 八百円 |
| 展示室C | 五千五百円 | 八千八百円 | 二千二百円 |
| 展示室D | 三千二百五十円 | 五千二百円 | 千三百円 |
| 展示室E | 千五百円 | 二千四百円 | 六百円 |
| 映像室 | 千円 | 千六百円 | 四百円 |

ロ 入場料その他これに類する料金を徴収して使用する場合は、この場合の使用料の額の二倍に相当する額

三 シアター等の使用の場合

イ 入場料その他これに類する料金を徴収しないで使用する場合

| 区分 | 金額（一時間につき） |
|----------|------------|
| シアター | 二千四百円 |
| 映写室 | 二百六十円 |
| アナウンスブース | 五十円 |
| ワークショップA | 九百円 |
| ワークショップB | 千三百円 |
| 暗室 | 百六十円 |
| スタジオ | 七百二十円 |
| 映像編集室 | 百八十円 |
| スタジオ映写室 | 二百十円 |

ロ 入場料その他これに類する料金を徴収して使用する場合は、この場合の使用料の額の二倍に相当する額

四 食堂施設又は売店施設の使用の場合

知事が定める額

青森県告示第 五百二十五 号

青森県立美術館条例（平成十七年十月青森県条例第六十九号）別表第四号の規定により、青森県立美術館の食堂施設及び売店施設の使用料の額を次のとおり定める。

平成十八年七月十二日

青森県知事 三村申吾

| 区分 | 金額（一年につき） |
|------|-----------|
| 食堂施設 | 八十三万四千八百円 |
| 売店施設 | 六十六万五千六百円 |

備考 使用期間が一年に満たないとき、又は使用期間に一年に満たない端数があるときは、その全期間又は端数部分について日割で計算する。

青森県立美術館規則

（趣旨）

第一条 この規則は、青森県立美術館条例（平成十七年十月青森県条例第六十九号。以下「条例」という。）第六条の規定に基づき、青森県立美術館（以下「美術館」という。）の管理に関し必要な事項を定めるものとする。

（開館時間）

第二条 美術館の開館時間は、午前九時三十分から午後五時まで（六月一日から九月三十日までの期間にあっては、午前九時から午後六時まで）とする。

2 美術館の副館長（以下「副館長」という。）は、必要があると認めるときは、前項の開館時間を変更することができる。

第三条 美術館の休館日は、次のとおりとする。

一 毎月第二月曜日及び第四月曜日（その日が国民の祝日に関する法律（昭和二十三年法律第七十八号）に規定する休日）に当たるときは、その翌日

二 十二月二十七日から同月三十一日までの日

2 副館長は、必要があると認めるときは、前項の休館日に開館し、又は同項の休館日以外の日に休館することができる。

（使用料の承認の手続）

第四条 条例第三条の規定による使用料の承認（以下「使用料の承認」という。）を受けようとする者は、使用申込書を知事に提出しなければならない。

2 知事は、使用料の承認をしたときは、当該使用料の承認を受けた者に使用承認書を交付するものとする。

（使用料の免除の申請）

第五条 条例第四条第二項の規定による使用料の免除を受けようとする者は、免除申請書を知事に提出しなければならない。

（使用料の取消し等）

第六条 副館長は、美術館の施設を使用する者（以下「使用者」という。）が不正な手段により使用料の承認を受けたと認めるときは、その使用料の承認を取り消し、又はその使用を制限することができる。

（原状回復等）

第七条 使用者は、故意又は重大な過失により美術館の施設、設備、美術品その他の芸術に関する資料等をき損し、又は汚損したときは、原状に復し、又は現品若しくはそれに相当する代価をもって弁償しなければならない。

附則

この規則は、平成十八年七月十三日から施行する。

附則

この規則は、平成二十七年四月一日から施行する。

青森県立美術館管理規程

（趣旨）

第1条 この規程は、青森県立美術館条例（平成17年10月青森県条例第69号。以下「条例」という。）及び青森県立美術館規則（平成18年7月青森県規則第72号。以下「規則」という。）に定めるもののほか、青森県立美術館（以下「美術館」という。）の管理に関し必要な事項を定めるものとする。

（観覧券の交付）

第2条 条例別表第1号に定める使用料を納入した者に対し、観覧券を交付するものとする。

（使用料の承認）

第3条 規則第4条第1項に規定する使用申込書の様式は、第1号様式とする。

2 規則第4条第2項に規定する使用承認書の様式は、第2号様式とする。

3 規則第4条に規定する使用承認の手続きに関し必要な事項は、副館長が別に定める。

（使用料の納付）

第4条 使用料の許可を受けた者は、納入通知書により指定する日までに使用料を納入しなければならない。

（使用料の還付）

第5条 納付された使用料は、還付しない。ただし、天災その他利用者の責めによらない理由により美術館を使用できなくなった場合は、この限りではない。

2 前項ただし書きにより使用料の還付を受けようとする者は、使用料還付請求書（第3号様式）を副館長に提出しなければならない。

（使用料等の免除）

第6条 副館長は、条例別表第1号に規定する常設展の観覧が次の各号のいずれかに該当するときは、規則第5条の規定により使用料の全部又は一部を免除するものとし、その免除の額は、当該各号に定める額とする。

一 教育課程に基づく学習活動として観覧する小学校、中学校、中等教育学校前期課程及び特別支援学校の児童、生徒及び引率する教職員が観覧するとき 使用料の全部の額

二 児童福祉法（昭和22年法律第164号）第7条に規定する児童福祉施設に入所している少年及び引率する当該施設の職員が観覧するとき 使用料の全部の額

三 身体障害者福祉法（昭和24年法律第283号）第15条

第4項の規定による身体障害者手帳の交付を受けている者及びその付添人が観覧するとき（ただし、免除する付添人は、当該障害者一人につき一人までとする。）使用料の全部の額

四 精神保健及び精神障害者福祉に関する法律（昭和25年法律123号）第45条第2項の規定による精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている者、療育手帳の交付を受けている知的障害者及びこれらの付添人が観覧するとき（ただし、免除する付添人は、当該障害者一人につき一人までとする。）使用料の全部の額

五 前各号に掲げるもののほか、副館長が特別の理由があると認めるとき 使用料の全部の額又は一部の額

2 前項第1号、第2号及び第5号に規定する常設展の使用料の免除を受けようとする者は、常設展の観覧使用料免除申請書（第4号様式）を副館長に提出しなければならない。

3 副館長は、条例別表第2号又は第3号に掲げる施設の使用が美術館の目的にふさわしい資料展示、講習会、研究会等のためであり、かつ、次の各号のいずれかに該当するときは使用料の全部又は一部を免除するものとし、その免除の額は、当該各号に定める額とする。

一 学校教育法（昭和22年法律26号）第1条に規定する学校が教育課程に基づく学習活動として使用するとき 使用料の全部の額

二 児童福祉法（昭和22年法律第164号）第7条に規定する児童福祉施設に入所している少年を対象とする事業に使用するとき 使用料の全部の額

三 身体障害者福祉法（昭和24年法律第283号）第15条第4項の規定による身体障害者手帳の交付を受けている者及びその付添人を対象とする事業に使用するとき 使用料の全部の額

四 精神保健及び精神障害者福祉に関する法律（昭和25年法律123号）第45条第2項の規定による精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている者及び療育手帳の交付を受けている知的障害者とこれらの付添人を対象とする事業に使用するとき 使用料の全部の額

五 美術館を構成員とする実行委員会等が主催して使用するとき 副館長が事案に即して相当と認める額又は使用料の全額

六 芸術の振興を目的として活動している団体が主体となつて、美術館と共催し使用するとき 使用料の2分の1に相当する額を基本として副館長が事案に即して相当と認める額

七 前各号に掲げる場合のほか、副館長が特別の理由があると認めるとき 副館長が定める額

4 前項に規定する施設の使用料の免除を受けようとする者は、施設使用料免除申請書（第5号様式）を副館長に提出しなければならない。

（美術品等の貸出）

第7条 副館長は、別に定めるところにより美術館の資料を貸し出すことができる。

（美術品等の寄託又は寄贈）

第8条 副館長は、別に定めるところにより美術資料の寄託又

は寄贈を受けることができる。

（美術資料の特別観覧）

第9条 副館長は、美術館に収蔵されている美術資料について学術研究等のために必要があると認めるときは、当該美術資料の模写、模造、撮影等（以下「特別観覧」という。）をさせることができる。

2 前項に規定する特別観覧をしようとする者は、特別観覧承認申請書（第6号様式）を副館長に提出しなければならない。

附則

この規定は、平成18年7月13日から施行する。

この規程は、平成19年6月25日から施行する。

この規定は、平成21年1月19日から施行する。

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

青森県立美術館アドバイザー・ボード設置要綱

（設 置）

第1 青森県立美術館（以下「美術館」という。）のより良い運営を推進するため、青森県立美術館アドバイザー・ボード（以下「アドバイザー・ボード」という。）を設置する。

（所 掌）

第2 アドバイザー・ボードは、美術館の運営に関して必要な助言等を行う。

（構 成）

第3 アドバイザー・ボードは、8名以内のアドバイザーをもって組織する。

2 アドバイザーは、学識経験を有する者その他適当と認められる者から知事が委嘱する。

3 アドバイザー・ボードに座長を置き、アドバイザーの互選により選出する。

4 アドバイザーに欠員を生じた場合の補欠のアドバイザーの任期は、前任者の残任期間とする。

（任 期）

第4 アドバイザーの任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

（会 議）

第5 アドバイザー・ボードは、青森県立美術館長が招集する。

2 アドバイザー・ボードの議長は、座長が務める。

3 座長に事故があるときは、座長が指示するアドバイザーがその職務を代理する。

（庶 務）

第6 アドバイザー・ボードの庶務は、美術館において処理する。

（その他）

第7 この要綱に定めるもののほか、アドバイザー・ボードの運営に関し必要な事項は、美術館が別に定める。

附 則

この要綱は、平成27年8月20日から施行する。

施設設備概要

建設概要

| | |
|-------|--------------------------------|
| 施設名称 | 青森県立美術館 |
| 所在地 | 青森市大字安田字近野 185 |
| 主用途 | 美術館 |
| 事業主体 | 青森県 |
| 設計監理 | 青木淳建築計画事務所 |
| | 構造：金箱構造設計事務所 |
| | 設備：森村設計 |
| | 音響：永田音響設計 |
| | 土系素材：I N A X |
| 施 工 | 建築：竹中・西松・奥村・北斗特定建設工事共同企業体 |
| | 強電：きんでん・五十嵐・野呂特定建設工事共同企業体 |
| | 弱電：奈良・高田特定建設工事共同企業体 |
| | 空調：高砂・青木・佐藤設備特定建設工事共同企業体 |
| | 衛生：芝管・五戸特定建設工事共同企業体 |
| | 昇降機：三菱電機株式会社 |
| 面 積 | 敷地面積：129,536.37㎡ |
| | 建築面積：7,223.07㎡ |
| | 延床面積：21,222.19㎡ |
| | 地下2階：4,736.15㎡ |
| | 地下1階：3,965.11㎡ |
| | 1階：5,339.02㎡ |
| | 2階：2,403.81㎡ |
| | 3階（機械エリア）：4,778.10㎡ |
| | 建ぺい率：5.58% |
| | 容積率：16.38% |
| 階 数 | 地下2階 地上3階 |
| 寸 法 | 最高高：16,160 mm |
| | 軒高：15,150 mm |
| | 階高：地下2階 2,300 - 19,000 mm |
| | 地下1階 2,500 - 7,500 mm |
| | 1階 2,700 - 11,000 mm |
| | 2階 2,500 - 4,000 mm |
| | 主なスパン：3,000 mm × 3,000 mm |
| 地域・地区 | 都市計画区域内 市街化区域 |
| 構 造 | 鉄骨鉄筋コンクリート造（地下1・2階） |
| | 鉄骨造（地上1 - 3階） |
| | 杭・基礎：杭基礎（PHC-ST 杭）600 φ・700 φ、 |

| | |
|-------|--|
| | (PHC 杭) 600 φ |
| 空調設備 | A H U ・ 定 風 量 単 一 ダ ク ト 方 式 、 一 部 F C U 、 空 冷 パ ッ ケ ー ジ 方 式 熱源：冷温水発生機（80USRt × 4 台）、加湿用蒸気ボイラ、空冷チラー（150KW × 6 台） |
| 照明設備 | スポットライト及び蛍光灯（調光設備・紫外線カット付） |
| 消火設備 | 屋内消火栓、スプリンクラー、不活性ガス（窒素）消火、加圧式粉末 ABC 消火器 設備項目：自火報・防排煙設備、屋内消火栓設備、スプリンクラー設備（開放型、予作動型）、窒素ガス消火設備（一部展示室、収蔵庫、熱源機械室） |
| 排煙設備 | 機械排煙設備（3 系統） |
| 防犯設備 | 開館時、常時警備員巡回。展覧会開催中は会場内に監視員を置く。展示室内には監視カメラを設置し、監視室にて監視。 |
| 衛生設備 | 給水：受水槽（42 t）+ 加圧給水ポンプユニット方式 給湯：局所式（電気温水器）、ガス湯沸器（厨房） 排水：ポンプアップ排水 |
| 電気設備 | 受電方式：高圧電力3 φ 3W 6,600 V 1 回線受電（業務用電力+融雪電力） 設備容量：2,650 kVA 契約電力：830 kW 予備電源：非常用発電設備 500 kVA、直流電源設備（非常照明用） 設備項目：受変電設備、自家発電設備、幹線設備、動力設備、電灯設備、展示調光設備、避雷設備、外構設備、電話設備、情報設備、インターホン設備、誘導支援設備、テレビ共同受信設備、監視カメラ設備、機械警備設備、放送設備、中央監視設備、外構設備、演出照明設備（シアター、スタジオ）、演出音響設備、映写設備（シアター） |
| 昇 降 機 | 荷物用エレベータ 1 台 乗用エレベータ 8 台 |
| 設計期間 | 1999 年 12 月 - 2002 年 3 月 |
| 施工期間 | 2002 年 12 月 - 2005 年 9 月 |
| 外部仕上げ | 屋根：ウレタン塗膜防水 外壁：煉瓦+アクリルシリコン塗装 外構：コンクリート舗装ほうき目仕上げ |

内部仕上げ

展示室（白）

床：カラーモルタル金こて押え $t = 20 \text{ mm}$ + 防塵
防汚塗装

壁：合板 $t = 15 \text{ mm} \times 2$ + プラスターボード $t = 12 \text{ mm}$ + 全面寒冷紗パテ処理 + EP

天井：合板 $t = 12 \text{ mm}$ + プラスターボード $t = 9 \text{ mm}$
+ EP

展示室（土）

床：タタキ $t = 50 \text{ mm}$

壁：版築 $t = 200 \text{ mm}$

天井：合板 $t = 12 \text{ mm}$ + プラスターボード $t = 9 \text{ mm}$
+ EP

コミュニティホール

床：クリフローリング $t = 15 \text{ mm}$

壁：プラスターボード $12 \text{ mm} \times 2$ + スタッコ

天井：人工木材ローズウッド練り付け
シアター

床：フェルト $t = 8 \text{ mm}$ + カーペット $t = 7 \text{ mm}$

壁：プラスターボード $t = 15 \text{ mm}$ + グラスウール
ボード + エキスパンダメタル $t = 6 \text{ mm}$ （樹脂
コーティング処理）

天井：グラスウール + プラスターボード $t = 15 \text{ mm}$
+ エキスパンダメタル $t = 6 \text{ mm}$ （樹脂コー
ティング処理）

オフィス

床：システム根太ユニット $600 \text{ mm} \times 600 \text{ mm}$ +
コンパネ $t = 12 \text{ mm}$ + クリフローリング $t =$
 15 mm

壁：プラスターボード $t = 12 \text{ mm} \times 2$ + EP

天井：プラスターボード $t = 12 \text{ mm}$ + 吸音板 $t = 12$
 mm + EP

アクセス

- J R 新青森駅から車で約 10 分
- 青森駅から車で約 20 分
- 青森空港から車で約 20 分
- 東北縦貫自動車道青森 I.C. から車で約 5 分
- (八戸方面から) 青森自動車道青森中央 I.C. から車で約 10 分
- 市営バス 青森駅前 6 番バス停から三内丸山遺跡行き
「県立美術館前」下車 (所要時間約 20 分)
- ルートバスねぶたん号新青森駅東口バス停から乗車
「県立美術館前」下車 (所要時間約 10 分)



青森県立美術館年報

令和 2 年度

編集・発行：青森県立美術館

青森市安田字近野 185 038-0021

017-783-3000

表紙デザイン：菊地敦己

印刷：青森オフセット印刷株式会社

発行日：2022 年 2 月